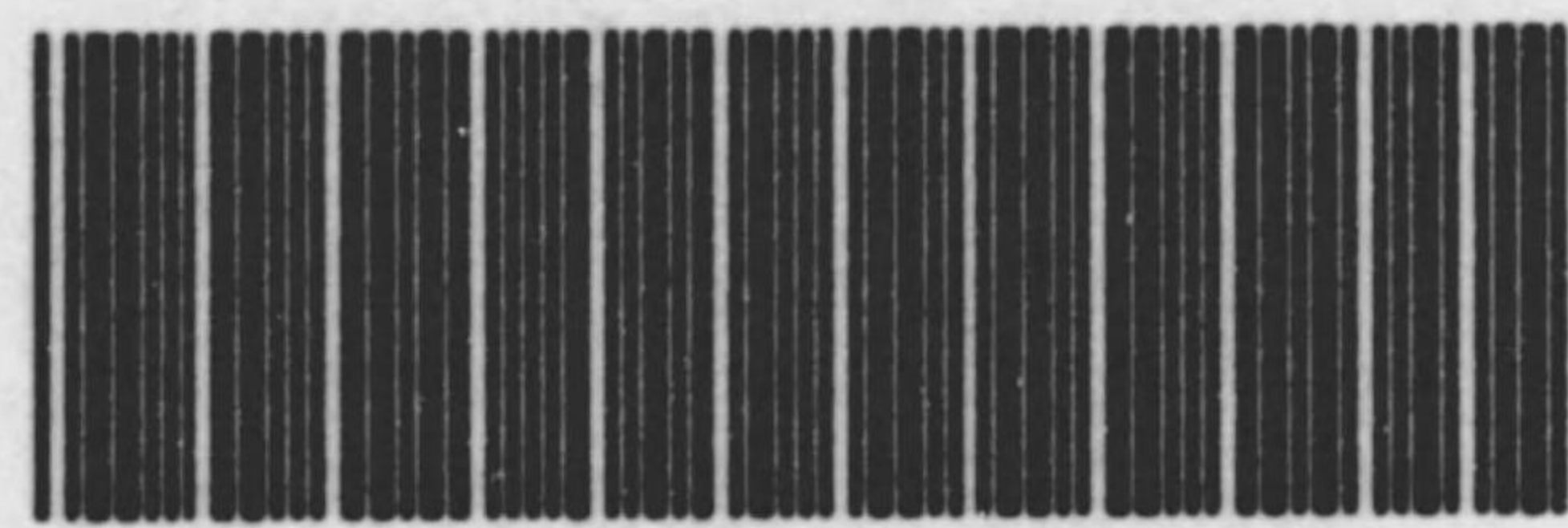


516
357

貴族院
函
号
册



* 0032977001 *

0032977-001

516-357

台湾現勢要覽

台湾總督府・編

台湾總督府

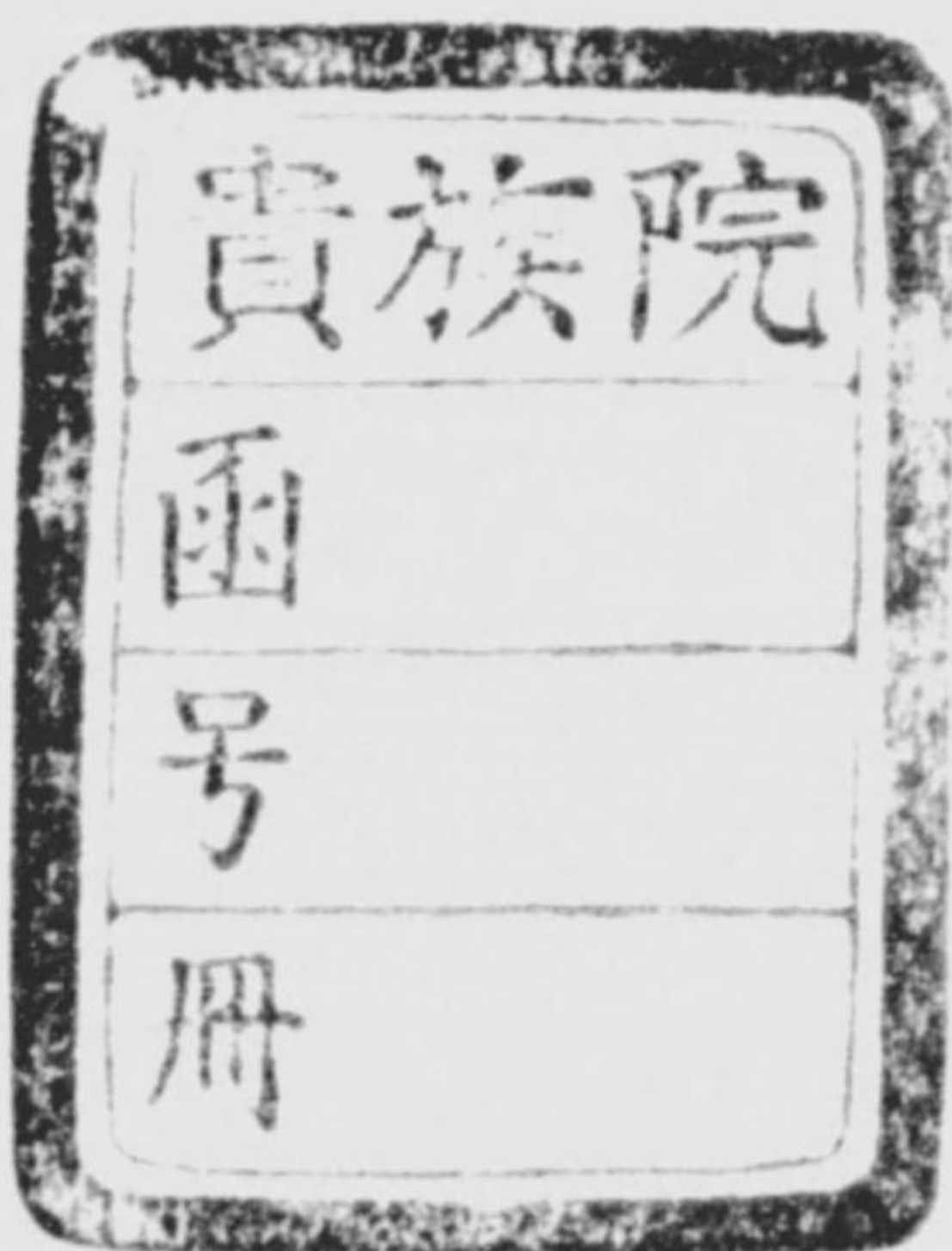
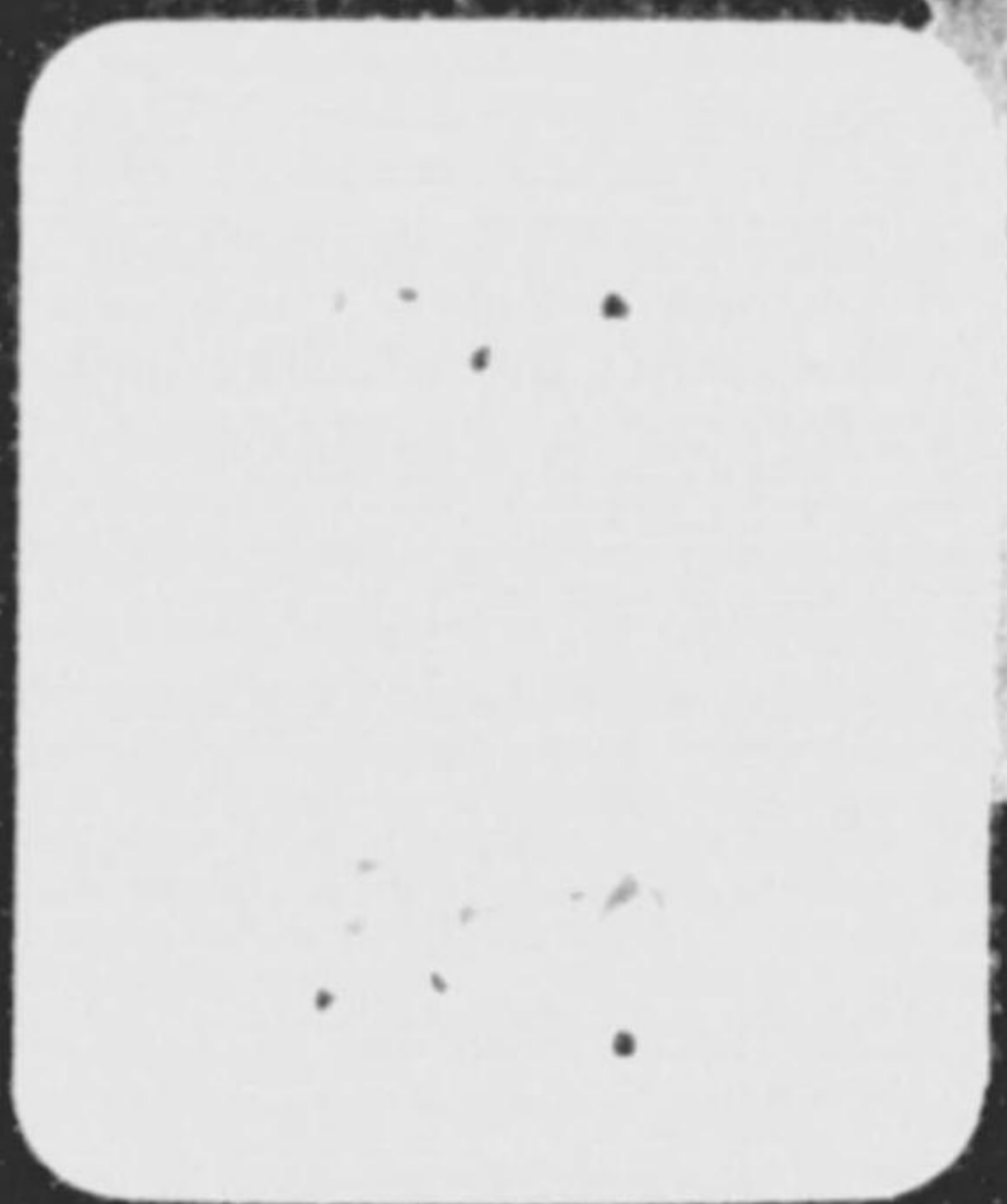
昭和2至4, 6, 8至10年版

昭和2-10

AFC

臺灣現勢要覽

昭和二年版



貴族院

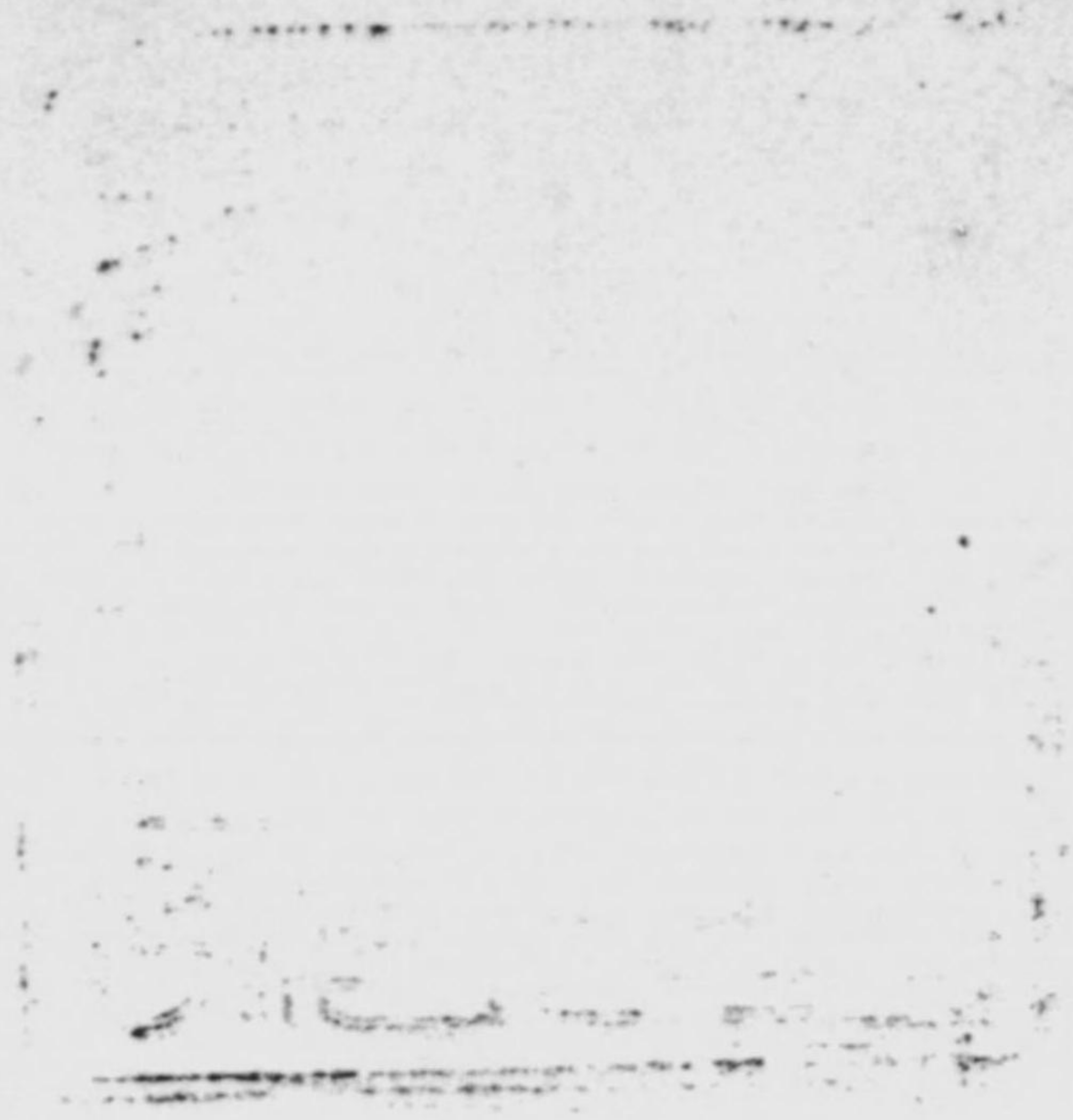
函

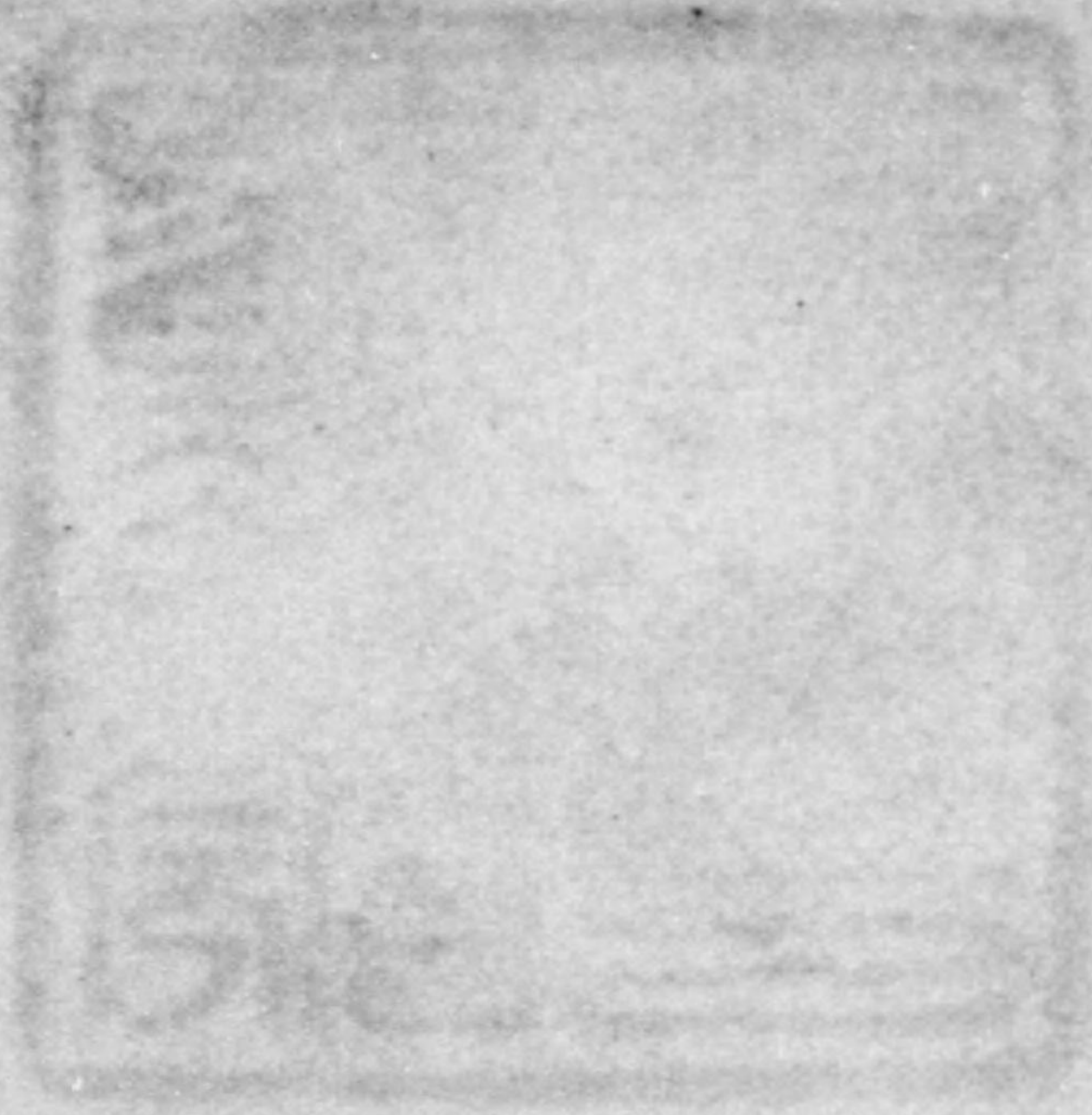
号

冊



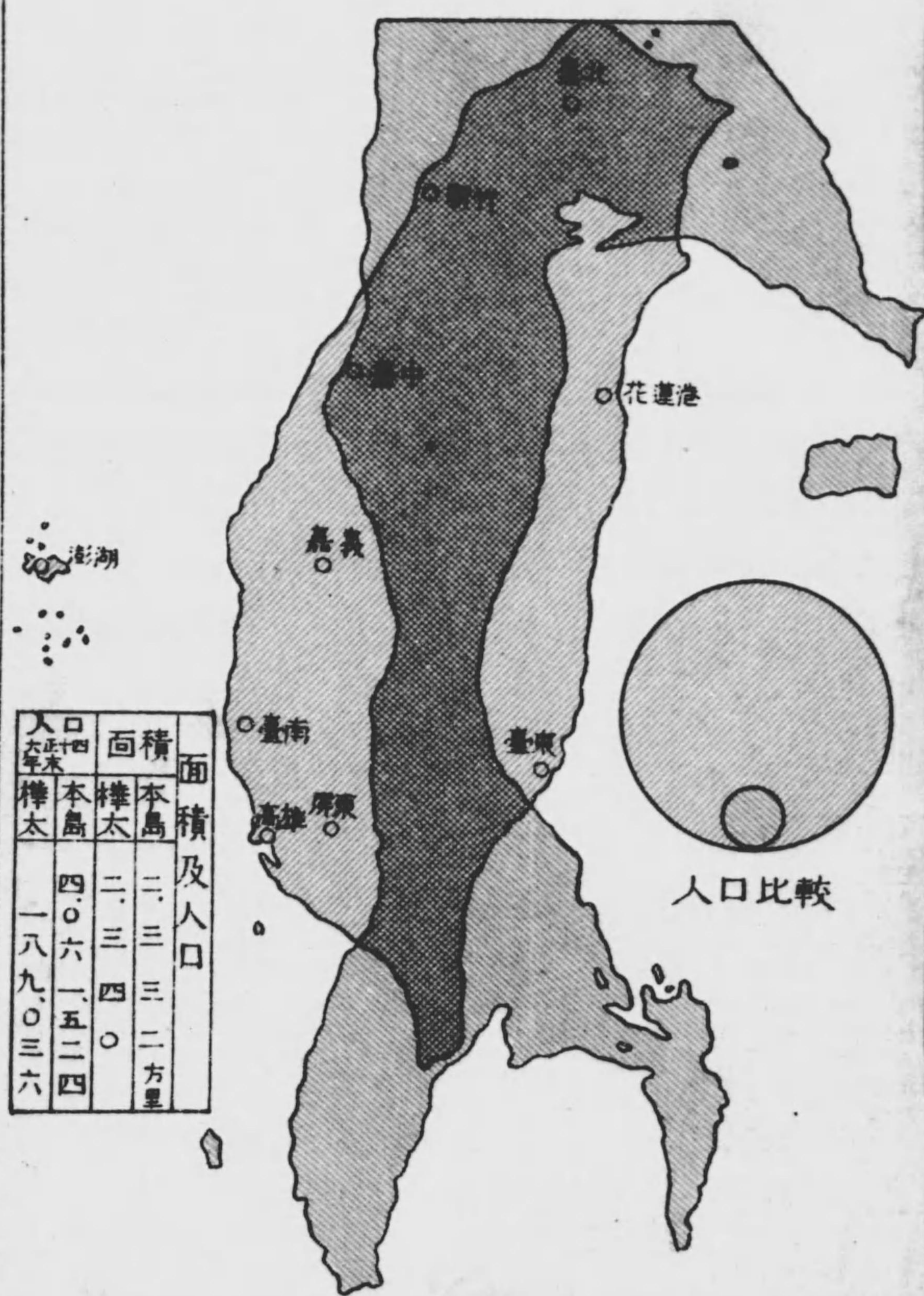
現勢要覽





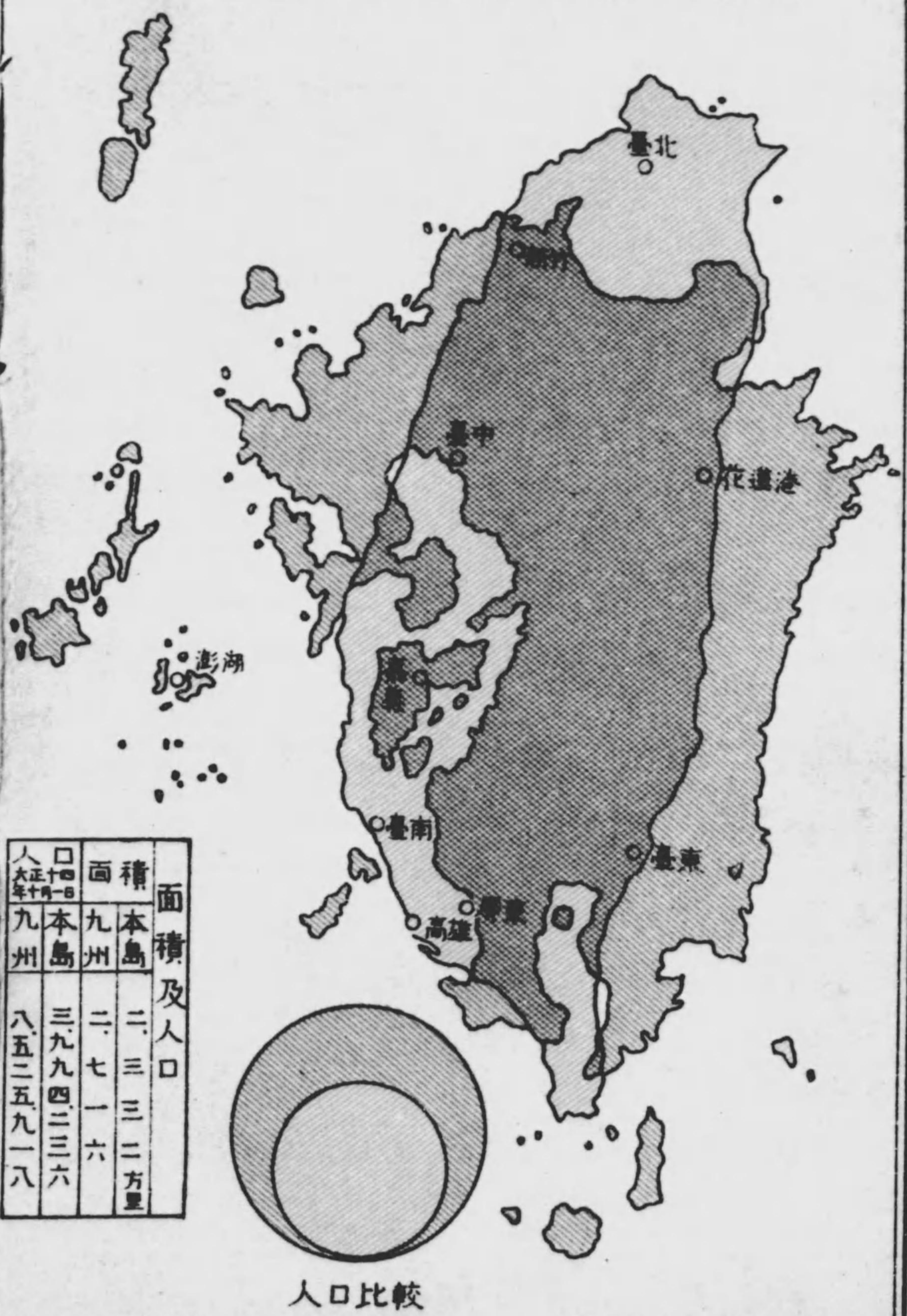
89W08954

臺灣及樺太面積並人口比較

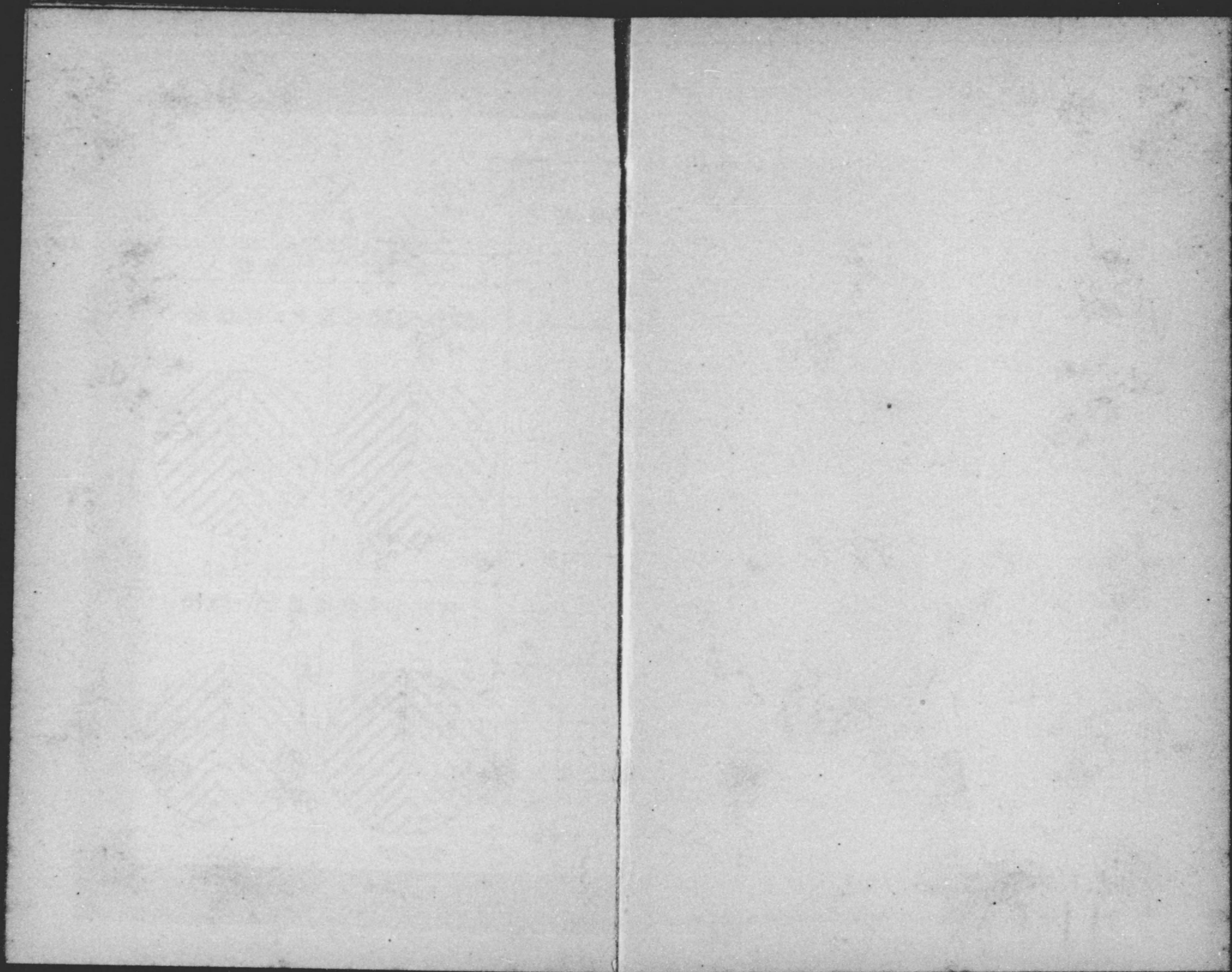


人口 大正十四 年本	面積		面積及人口
	樺太	本島	
一八九,〇三六	四〇六,一五四	二,三三三,二方里	

臺灣及九州面積並人口比較



人口 大正十四 年本	面積		面積及人口
	九州	本島	
八五二,五九一八	三九九,四三三六	二,三七一,一六	



婚姻及離婚

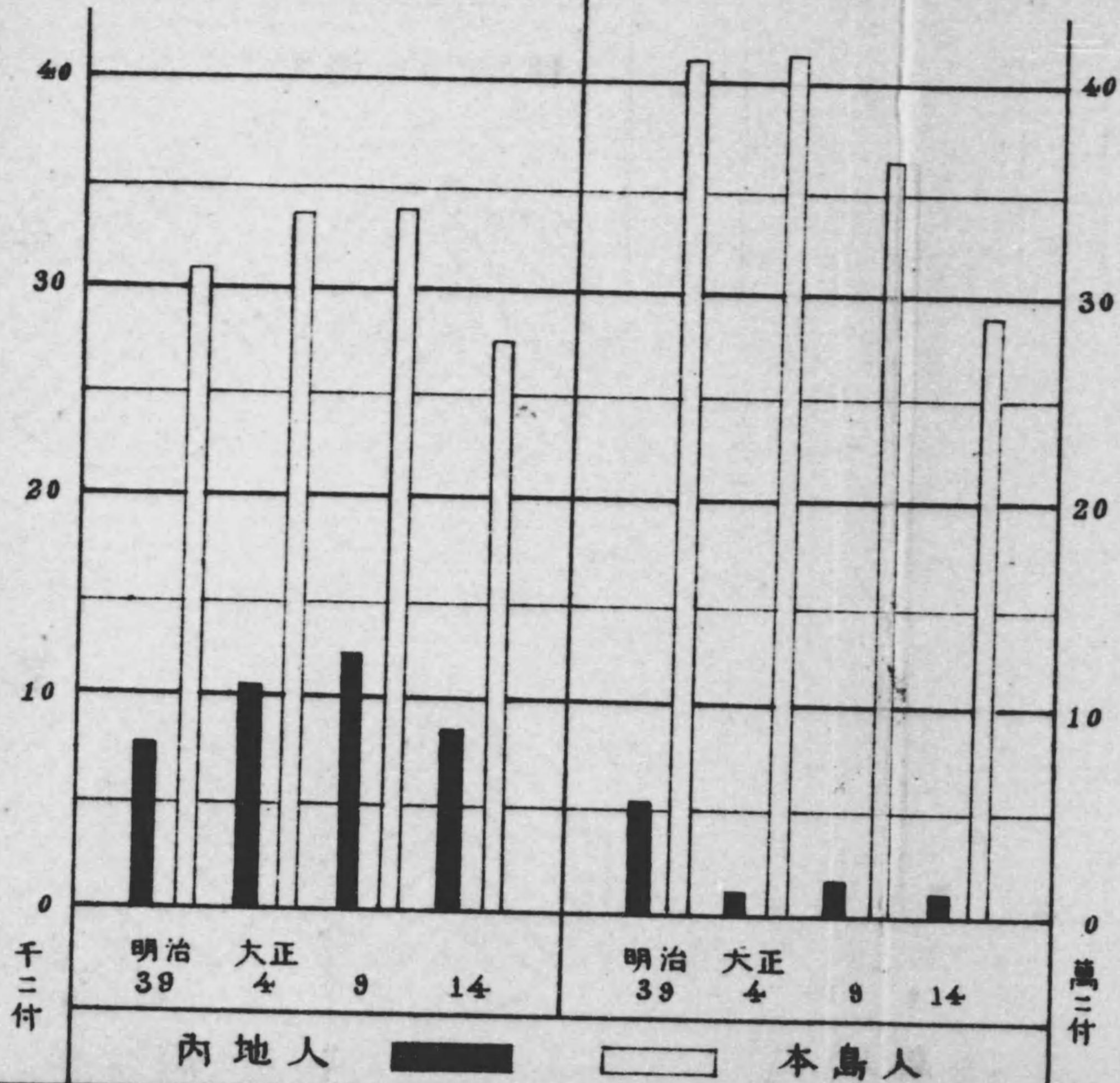
大正十四年

適婚者千ニ付婚姻

(内地人十六歳以上本島人十一歳以上)
(内縁者 死別者 離婚者ヲ含ム)

有配者萬ニ付離婚

(内縁者ヲ含マス)



女



婚姻

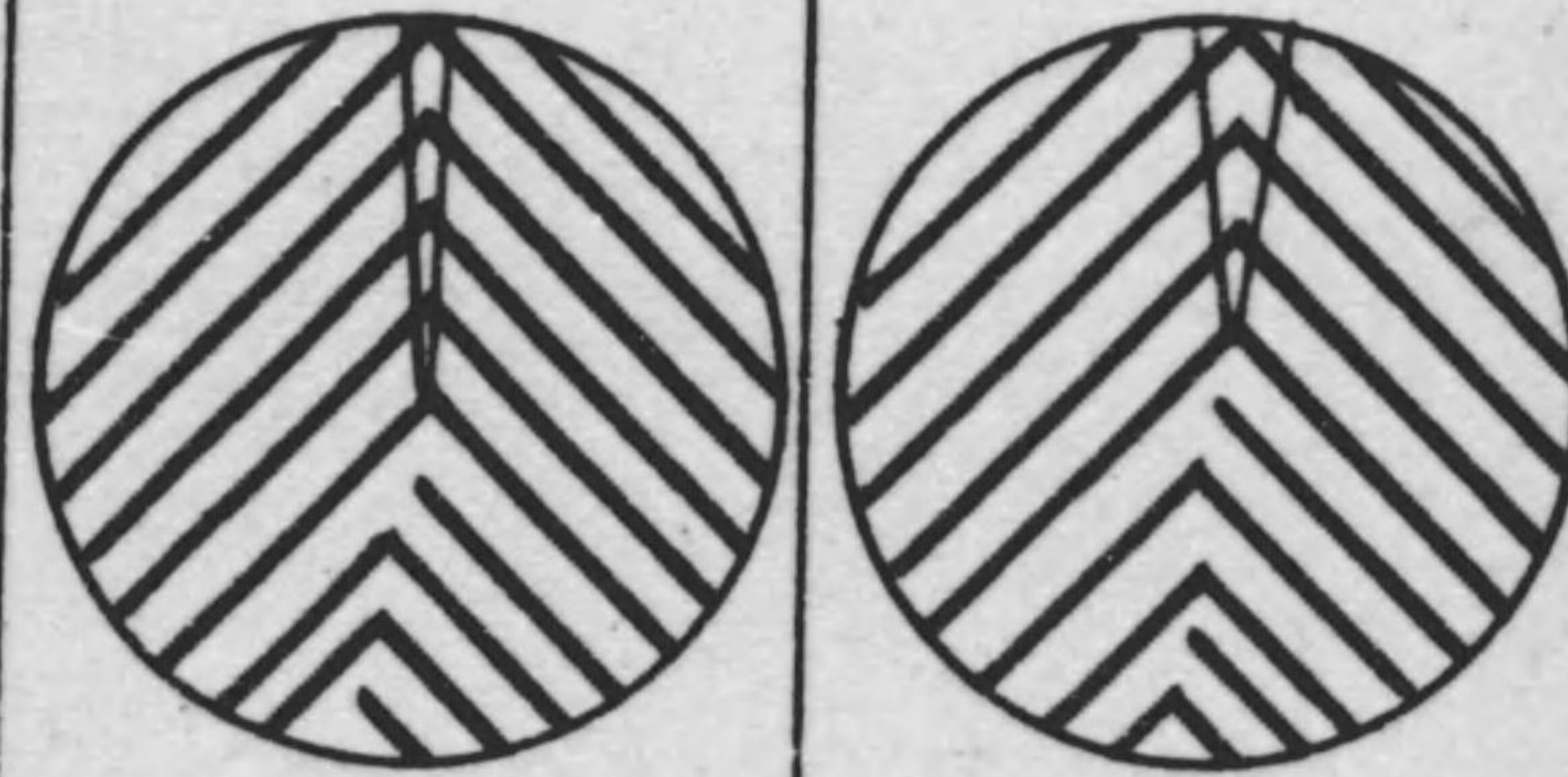


男

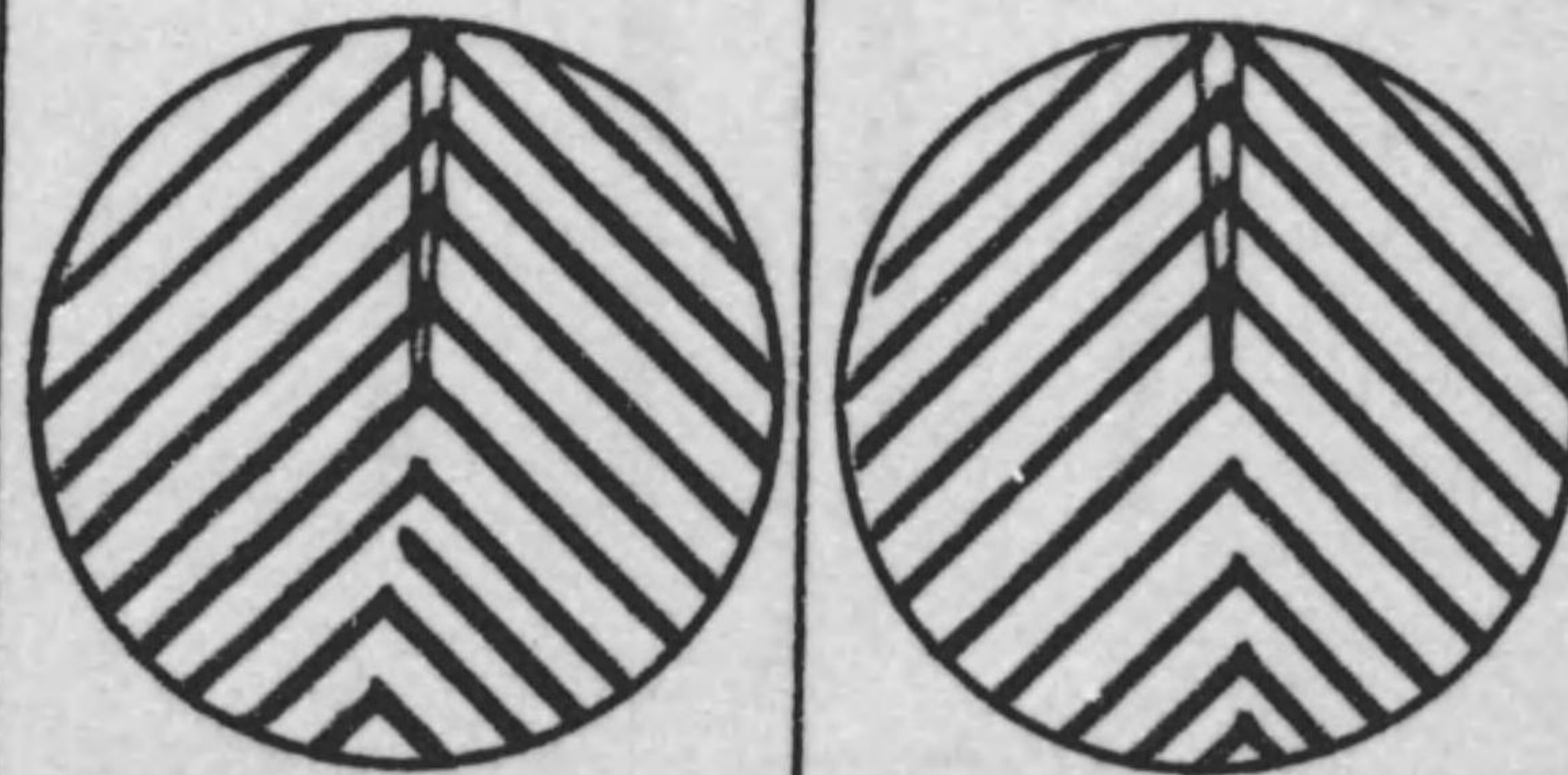
内地人

本島人

體性別適婚者千ニ付婚姻



體性別有配者萬ニ付離婚



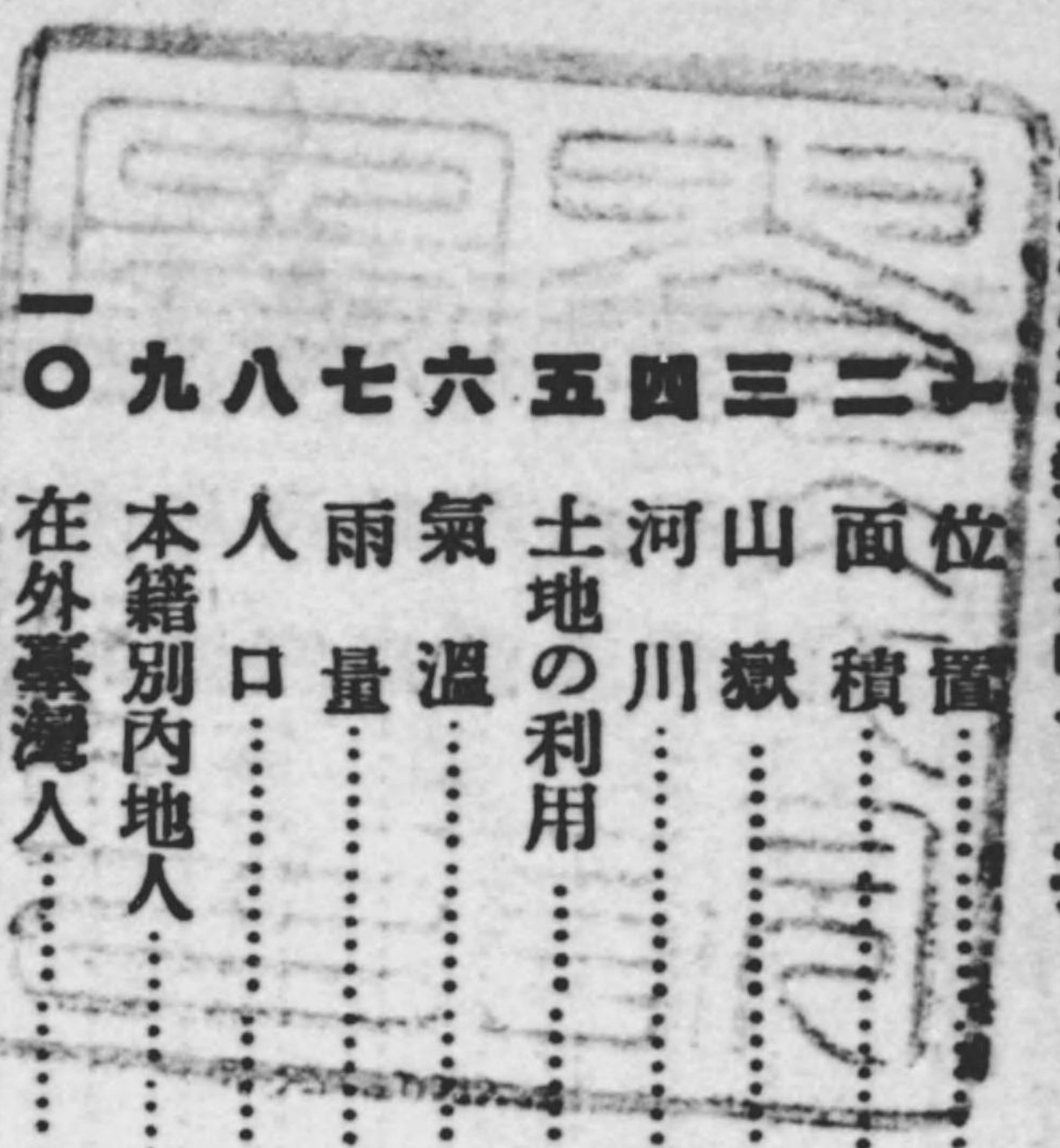


凡 例

- 一 本書は、臺灣の現勢を知るの便に資せんか爲め、主要なる事項に就て、その統計的説明を試みたるものなり。
- 二 本書は、大正十四年の事實を基礎としたるも、その最近の統計あるものは、努めて之を採り、又大正十四年の事實不明のもの又は特に必要と認めたるものは、大正十四年以前の統計をも採りたり。
- 三 本書は、主として臺灣の現勢を知るを目的とするも、特にその變遷進歩の狀態を説明するの必要ある事項に就ては、累年の統計をも擧げたり。
- 四 本書は、帝國に於ける臺灣の地位を説明するの便に供せんか爲め、その必要なる事項に就ては、内地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

昭和二年五月

臺灣現勢要覽目次



七	六	五	四	三	二	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一
人口の増加	死亡率	出生率	婚姻、離婚、出生、死亡	國語を解する本島人	臺灣語を話す内地人	在留外國人	在外臺灣人	本籍別内地人	人口	雨量	氣温	土地の利用	河川	山嶽	面積	位置
.....
四七	三三	三三	三三	三〇	二六	二六	三〇	二〇	二七	二四	三〇	二〇	一〇	六	四	一

圖表

三七	重要品別内地貿易	九〇
三八	港別貿易	九〇
三九	財政	九〇
四〇	專賣	九〇
四一	銀行	九〇
四二	物價	九〇
四三	教育	九〇
四四	衛生機關	九〇
四五	水道	九〇
四六	ベストとマラリア	九〇
四七	阿片吸食特許者	九〇
四八	鐵道	九〇
四九	郵便、電信、電話	九〇
五〇	警察官署及職員	九〇
五一	最近十四年間の進歩	九〇
一	臺灣及九州面積並人口比較	九〇
二	臺灣及樺太面積並人口比較	九〇
三	婚姻及離婚	九〇

一八	蕃人	八〇
一九	行政區劃	八〇
二〇	州及廳の面積	八〇
二一	州及廳の人口	八〇
二二	主要都市	八〇
二三	農業戶數	八〇
二四	耕地面積	八〇
二五	水利	八〇
二六	農產	八〇
二七	畜產	八〇
二八	林產	八〇
二九	礦產	八〇
三〇	水產	八〇
三一	工業	八〇
三二	糖業	八〇
三三	貿易	八〇
三四	對手國別外國貿易	八〇
三五	支那、香港及南洋貿易	八〇
三六	重要品別外國貿易	八〇

臺灣現勢要覽



位置

臺灣は帝國の東南部に
 緯度(北緯)に緯ぬるに
 二十五度三十分より
 三十五度三十分より
 澎海峽を隔て、近く、
 ツシマ海峽を隔て、
 比律賓群島に相隣す。

度及緯度

臺灣本島	澎湖本島
緯度(北緯)	緯度(北緯)
極東 臺北州基隆市棉花嶼東端 二三・〇六	極東 臺北州基隆市棉花嶼東端 二三・〇六
極西 臺南州北港郡口湖庄新港西端 二〇・〇三	極西 臺南州北港郡口湖庄新港西端 二〇・〇三
極南 高雄州恒春郡七星岩南端 二二・〇〇	極南 高雄州恒春郡七星岩南端 二二・〇〇
極北 臺北州基隆市彭佳嶼北端 二五・〇六	極北 臺北州基隆市彭佳嶼北端 二五・〇六
經度(東經)	經度(東經)
極東 澎湖廳湖西庄查母嶼東端 一三九・〇〇	極東 澎湖廳湖西庄查母嶼東端 一三九・〇〇
極西 望安庄花嶼西端 一三九・〇六	極西 望安庄花嶼西端 一三九・〇六
極南 望安庄大嶼南端 一三九・〇〇	極南 望安庄大嶼南端 一三九・〇〇
極北 白沙庄目斗嶼北端 一三九・〇六	極北 白沙庄目斗嶼北端 一三九・〇六

那 鹿 長 門 神 橫 釜 大 福 厦 汕 上 香 麻 海 西 盤

兒 尼

二 距

那 島 崎 司 戶 濱 山 連 州 門 頭 海 港 刺 防 貢 谷

(香港經由)

(鹿兒島沖通過)

(門經由)

離

基隆を基點とする直航里程

一八五 一三〇 九六一 七六六 四九九 四八八 三三八 三三六 二五一 八五〇 八三三 一、二七 九八二 七九七 六三三 六四四 三三四

新 嘉 坡
バ タ ビ ヤ

一、八三四
二、六九四

二面積

臺灣の面積は二千三百三十二方里にして、帝國の總面積四萬三千七百三方里中その五分三厘を占め、九州よりは稍小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。尙ほ之を列國の面積に比すれば、瑞西(二千六百七十八方里)とサルバドル(二千二百十三方里)との中間に位す。

	面積 方里	百分比
總數	四三、七〇三	100.0
臺灣	二、三三三	五.三
朝鮮	一四、三三三	三.七
樺太	二、三〇〇	五.四
北海道	五、七二四	一三.一
内地府縣	一八、九九五	四三.五

本表の外租借地として關東州(州内、州外)の面積二百四十一方里及南洋委任統治區域の面積百三十九方里あり。
 朝鮮、樺太、關東州は同應統計書に依る。
 北海道、内地府縣及南洋委任統治區域は帝國統計年鑑に依る。

能高山南峰	11,000	二
卑南主山	10,905	元
千卓萬山	10,903	三
カシバナ山	10,869	三
郡大	10,865	三
タロコ大	10,863	三
卓社大	10,816	三
小關	10,770	三
能高山	10,731	三
屏風	10,673	三
大武	10,665	三
尖	10,631	三
バトツノ山	10,630	三
北嶽(内地)	10,534	三
間ヶ嶽(内地)	10,524	三
鎗ヶ嶽(内地)	10,491	三
槍ヶ嶽(内地)	10,487	三
ハイノトナ山	10,478	三
マビイサン山	10,450	三

白石山	10,354	七
ウワノシン山	10,334	四
赤石山(内地)	10,296	四
奥徳高岳(内地)	10,240	五
東俣山(内地)	10,222	五
穂高岳(内地)	10,197	五
安東郡山	10,193	五
巒大	10,150	五
御嶽山(内地)	10,109	五
關門山	10,073	五
大石公山	10,060	五
白根山(内地)	10,055	五
小雪山	10,033	五
仙丈ヶ嶽(内地)	10,009	六
南嶽(内地)	10,008	六

内地の方は第四十四回國勢一班に依る。

四河川

臺灣は幅員狭く、その最も廣き部分と雖、僅かに四十里内外に過ぎず、且つ高峰南北に貫通するを以て、河川の發源孰れも近く、舟楫の便は多く望むべからず。流域二十里以上のもの僅かに十を算し、最長の河川たる濁水溪にして漸く四十二里に過ぎず。

濁水溪	四二里
曾文溪	三九七
淡水河	三三七
大甲溪	三三二
烏桕溪	三〇〇
八掌溪	二八六
秀姑巒溪	二八三
卑南溪	三三六
大安溪	二二五
大甲溪	二〇五

本表は流域二十里以上のものゝみを掲ぐ。

五 土地の利用

臺灣の總面積は三百六十二萬七千町步(三百七十萬八千甲)にして内、耕地七十八萬二千町步(七十九萬九千甲)、林野二百五十九萬九千町步(二百六十五萬七千甲)、其の他二十四萬六千町步(二十五萬一千甲)なり。

今之を内地其の他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の五割二分三厘にして、臺灣は二割一分六厘を以て之に亞き、樺太の五厘最も小なり。林野に於ては、樺太の九割一分五厘最も大にして、臺灣は七割一分六厘を以て第二位を占め、關東州の二割五分四厘最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは内地府縣の二割四分九厘にして、臺灣の六分八厘最も小なり。

實數	耕地			百分比		
	耕地	林野	其他	耕地	林野	其他
臺灣	七八、九八	二、五九、三三	二、四六、〇七	二六	七六	六八
朝鮮	四、三、八、三五	一、五、八、三、〇〇	二、〇、六、六、七	一九五	七二四	九一
樺太	一九、九八〇	三、三、八、〇〇	二九、一、八八	〇五	九一五	八〇
關東州	一九六、〇八一	九、五、〇、三三	八、三、七、〇九	五三三	二五四	三三三
北海道	七六、三三七	六、二、六、八、三五	一、八、四、七、四〇	八八	七〇四	二〇八
内地府縣	五、二、〇、六、七六	一、六、九、〇、一、三五〇	七、三、五、八、九、九六	一七九	五七二	二四九
耕地は大正十四年末現在なり。						

林野の臺灣、樺太、關東州(州内、州外)は大正十四年末現在、朝鮮は大正十五年五月末現在、内地及北海道は大正十三年末現在なり。

朝鮮、樺太、關東州は同應統計書に依る。

北海道、内地府縣の耕地は農林省統計表に依り、林野は帝國統計年鑑に依る。

六氣 温

臺灣は北回歸線に跨り、半は熱帶圈に位するか故に、内地に比すれば夏季長く、冬季短きも、その最高氣温は敢て内地より高しと謂ふにあらず。而も冬季は頗る暖かにして、高山ならされは降雪なく、北部の平地に於ては偶々霜を見る事なしとせざるも極て稀なり。今内地其他と比較するに、累年平均氣温は我臺灣最も高きも、最高極度の氣温に至りては内地其他の部分却つて高し。即ち臺東の三十九度(華氏百二度二分)は新潟の三十九度一分(華氏百二度四分)より一分低く、又臺北の三十七度五分(華氏九十九度五分)は京城と同じくして大阪の三十七度六分(華氏九十九度七分)より一分低し。更に澎湖の三十三度五分(華氏九十二度三分)及恒春の三十四度九分(華氏九十四度八分)は大泊及函館を除けば他の何れの地方よりも低し。

臺	大正十四年平均				累年	
	攝氏	華氏	攝氏	華氏	最高の極	最低の極
臺灣	攝氏 24.0	華氏 75.2	攝氏 24.3	華氏 75.7	攝氏 34.9	攝氏 9.8
恒春	攝氏 23.1	華氏 73.6	攝氏 23.4	華氏 74.1	攝氏 39.0	攝氏 10.2
臺東	攝氏 23.6	華氏 73.7	攝氏 23.0	華氏 73.4	攝氏 36.9	攝氏 9.4
澎湖	攝氏 23.1	華氏 72.8	攝氏 23.5	華氏 73.5	攝氏 33.5	攝氏 9.3

臺	臺	朝	臺	樺	關	北	函	札	旭	内地府	那	長	大			
中	北	鮮	山	城	津	太	州	順	道	館	幌	川	縣	霸	崎	阪
攝氏 22.7	攝氏 22.3	攝氏 22.3	攝氏 23.6	攝氏 20.9	攝氏 18.4	攝氏 36.0	攝氏 36.0	攝氏 10.3	攝氏 9.2	攝氏 7.5	攝氏 6.2	攝氏 2.2	攝氏 1.5	攝氏 1.5	攝氏 1.5	攝氏 1.5
華氏 72.1	華氏 70.3	華氏 70.3	華氏 56.5	華氏 51.6	華氏 47.1	華氏 38.5	華氏 38.5	華氏 50.5	華氏 48.6	華氏 45.5	華氏 43.2	華氏 70.2	華氏 59.5	華氏 59.5	華氏 59.5	華氏 59.5
攝氏 23.1	攝氏 22.6	攝氏 22.6	攝氏 13.5	攝氏 10.8	攝氏 7.9	攝氏 28.0	攝氏 28.0	攝氏 10.2	攝氏 8.5	攝氏 6.9	攝氏 5.2	攝氏 3.2	攝氏 2.7	攝氏 2.7	攝氏 2.7	攝氏 2.7
華氏 72.8	華氏 70.9	華氏 70.9	華氏 56.3	華氏 51.4	華氏 46.2	華氏 37.0	華氏 37.0	華氏 50.2	華氏 47.3	華氏 44.4	華氏 41.4	華氏 71.8	華氏 60.3	華氏 60.3	華氏 60.3	華氏 60.3
攝氏 27.2	攝氏 27.5	攝氏 27.5	攝氏 35.0	攝氏 37.5	攝氏 37.5	攝氏 29.2	攝氏 29.2	攝氏 35.4	攝氏 33.5	攝氏 35.5	攝氏 35.0	攝氏 35.5	攝氏 36.7	攝氏 36.7	攝氏 36.7	攝氏 36.7
攝氏 29.0	攝氏 29.5	攝氏 29.5	攝氏 35.0	攝氏 37.5	攝氏 37.5	攝氏 29.2	攝氏 29.2	攝氏 35.4	攝氏 33.5	攝氏 35.5	攝氏 35.0	攝氏 35.5	攝氏 36.7	攝氏 36.7	攝氏 36.7	攝氏 36.7
攝氏 35.1	攝氏 35.5	攝氏 35.5	攝氏 45.0	攝氏 47.5	攝氏 47.5	攝氏 39.2	攝氏 39.2	攝氏 45.4	攝氏 43.5	攝氏 45.5	攝氏 45.0	攝氏 45.5	攝氏 46.7	攝氏 46.7	攝氏 46.7	攝氏 46.7
攝氏 35.1	攝氏 35.5	攝氏 35.5	攝氏 45.0	攝氏 47.5	攝氏 47.5	攝氏 39.2	攝氏 39.2	攝氏 45.4	攝氏 43.5	攝氏 45.5	攝氏 45.0	攝氏 45.5	攝氏 46.7	攝氏 46.7	攝氏 46.7	攝氏 46.7
攝氏 35.1	攝氏 35.5	攝氏 35.5	攝氏 45.0	攝氏 47.5	攝氏 47.5	攝氏 39.2	攝氏 39.2	攝氏 45.4	攝氏 43.5	攝氏 45.5	攝氏 45.0	攝氏 45.5	攝氏 46.7	攝氏 46.7	攝氏 46.7	攝氏 46.7

東	京	三三八	三六八	三三九	五七〇	三六六	九七九	一九一七	(1) 八二	一七三	七一
新	潟	三三九	五三二	三三六	五四七	三九一	一〇三四	四二一八	(1) 九七	一四五	三五二
青	森	九九	四九八	九三	四八七	三六〇	九六八	四一八	(1) 九〇	(1) 二二	二四二

(1)は零點下を示す。

七 雨 量

臺灣は南北に依り其の降雨期を異にす。即ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月、南部は五月より九月に至る夏期五箇月を雨期とす。北部は基隆附近最も降雨量多く、基隆に近き暖暖街は一年五千耗を以て第一位を占め、且つ世界有数の降雨地として知らる。南部に於ては潮州郡蕃地クワルスの五千三百耗最多量を示し、降雨量の最も少きは澎湖島にして一年の總量九百六十耗なり。更に之を内地其の他と比較するに、臺灣は全島を通して一般に他の地方よりも降雨量多し。

大正十四年 總雨量

累年平均 總雨量

大正十四年 最多日量

大正十四年 最多日量

臺灣	恒春	臺東	臺南	澎湖	嘉義	臺中	臺北
一八〇七	一三三七	一四二四	七〇一	五三三八	一四〇九	二二一八	
二二六六	一八四八	一七三六	九六七	五三八四	一六九五	二〇三二	
二七九	一四〇	二二六	八五	四三〇	一六〇	一七三	
七一九	七一〇	八一四	七一五	七一三	九一五	九一五	

青新

森湯

一四八五
一五三八

一三九二
一八二五

六六

七一八
九一六

東	大	長	那	内 地 府	旭	札	函	北	旅	關	大	樺	城	京	釜	朝	暖	基
								海		東								

京	阪	崎	霸	縣	川	幌	館	道	順	州	泊	太	津	城	山	鮮	暖	隆
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

一七三	一七三	一六九	一七三	八三	一〇八	一〇九	五九	五九	七八	一九三	一四七	四五一	二九二
-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	----	----	----	-----	-----	-----	-----

一七〇	一七三	一九四	二一四	一〇七	一〇三	一一九	五七	七四	六六	一九二	一四八	五〇六	二九八
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	-----	-----	-----	-----

三六	三三	三五	三二	三三	一〇	七〇	三	六	一	九五	一七	二七	二七
----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	----	----	----	----

八一六	九一〇	九一七	一一一	八一八	一〇八	八一三	九一一	九一八	八一五	七一七	七一三	九一五	九一五
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

八人口

臺灣の總人口は大正十四年末現在四百十四萬人にして中、内地人十八萬九千人、本島人三百八十三萬八千人、蕃人八萬六千人(蕃地居住)、外國人三萬三千人なり。
 大正十四年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、帝國の總人口は八千三百萬人を算し、臺灣は三百九十九萬人にして、實に其の四分八厘を占む。(蕃地居住の蕃人を除く)
 更に臺灣の人口を列國のそれに比すれば、蘇格蘭(四、八九三、〇三二)と瑞西(三、九三六、三三〇)との中間に位す。

一 種族別人口 (大正十四年末現在)

種族	總數	男	女	百分比例
内地人	四、四七、四六二	二、三三、〇六六	二、一四、三九六	一〇〇
本島人	一、九六、三三〇	一、〇一、九三三	八七、〇三七	四六
蕃人	三、八八、六六六	一、九六、二〇九	一、八六、五五七	五五
外國人	八五、九三八	四三、二七七	四二、六一一	二二
外國人中には平地の蕃地に居住する蕃人五萬七百六十八人を合算せり。故に本表の蕃人には蕃地の蕃地に居住する者のみを掲上せり。	三、二五八	三、八五七	九四〇一	〇八

二 内地其他との人口比較 (大正十四年十月一日現在)

地域	實數	百分比例	一方里に付
臺灣	八三、四三、六六一	一〇〇	一九二〇
朝鮮	三、九三、四〇八	四八	三、二二〇
樺太	一九、五九、九二七	二三	一、三六四
北海道	二、〇三、五〇四	二四	八七
内地府縣	二、四九、八六七九	三〇	四七
内地府縣	五七、三三、一四三	六八	四七

本表の外租借地としての關東州(州内、州外)は人口一、〇五四、〇七四人を有し、一方里に付人口四、三七四人及南洋委任統治區域は人口五六、二九四人を有し、一方里に付人口四〇五人を算す。
 朝鮮、樺太、關東州及南洋委任統治區域は帝國統計年鑑に依る。
 北海道、内地府縣は國勢調査報告に依る。

三德茨京和靜島福香石沖鼓高宮岡愛愛新兵
歌

重島城都山岡根島川川繩阜知崎山媛知瀧庫

四四五六
四三三〇
三八二五
三七三三
三二三四
二八二〇
二七九〇
二六五〇
二四三三
二四二八
二四〇一
二三九〇
二三二七
二二九五
二二〇六
二一四二
二一二三
一九七九
一九三三

二七
二六
二三
二三
二二
一九
一七
一七
一六
一五
一五
一五
一五
一四
一四
一三
一三
一三
一二

三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二

九 本籍別内地人

臺灣在住内地人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、十六萬四千人にして内、熊本縣の一萬六千三百五十三人第一位を占め鹿兒島縣は一萬六千二百七十二人を以て之に亞き、福岡縣は遙かに下りて八千八百九十八人を以て第三位に在り、廣島、山口の兩縣順次に亞き其の最も少きは青森縣の二百八十二人なり。

府縣	人口	百分比	順位
熊本縣	一六三三五	一〇・二	一
鹿兒島	一六二七三	九九	二
廣島	八八九八	五四	三
山岡	八四〇一	五一	四
佐賀	七四六三	四五	五
東京	六七八〇	四二	六
長崎	六三四七	三九	七
宮城	六〇三八	三七	八
大阪	五六五七	三四	九
分府	四六七五	二八	一〇
大分	四五三四	二八	一一

10. 邦人

長福千神滋山鳥富山群埼奈北岩秋青
 野井川賀形取山梨馬玉良道木手田森
 奈 海

内地人總數十六萬四千二百六十六人中、内地に本籍を有せざる者二十六人、本籍不詳九人を除く。

森田手木道良玉馬梨山取形賀川葉井野

一八七三
 一七六六
 一七四九
 一六〇六
 一五八六
 一四九〇
 一三八六
 一二四七
 一〇六二
 一〇三三
 一〇三三
 一〇三三
 九二二
 八九五
 八七
 七六
 二八二

〇二
 〇四
 〇五
 〇五
 〇六
 〇六
 〇六
 〇六
 〇六
 〇八
 〇八
 〇九
 一〇
 一〇
 一二
 一二
 一二

七
 六
 五
 四
 四
 四
 四
 四
 四
 三
 三
 三
 三
 三
 三
 三

一〇 在外臺灣人

在外臺灣人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にしてその大部分は支那に在留す。即ち支那在留臺灣人の總數は四千二百三十六人にして、就中その三千八十五人は對岸廈門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十六人を算す。

支那以外の地方に在りては、爪哇の二百十八人第一位を占め、海峽植民地の百五人之に亞く。

總數	男	女
關東	四七五	一七〇
青島	四	一五
支那	三〇二五	一六二一
廈門	二六三	一七四
福州	一九二	一二七
汕頭	四八	三八
廣東	一三三	三三
爪哇	二八	三
其他	一八	三
總數	四七五	一七〇

海峽植民地	新嘉坡	其他	緬甸	暹羅	香港	比羅	濠洲	智律
一〇五	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
八	六	六	六	六	六	六	六	六
二	七	九	八	五	五	五	五	五

一一 在留外國人

臺灣在留外國人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、二萬三千六百六十四人なり、今之か國籍を釋ぬるに、支那人はその大部分を占め二萬三千四百六十七人を算し、英吉利人の八十九人、北米合衆國人の四十二人順次之に亞く。

佛	瑞	露	獨	比	ベ	英	智	西	北	英	支	總
蘭	西	西	律	ネ	領	班	米	合	吉	利	那	數
西	典	亞	逸	賓	ラ	度	利	牙	國	利	那	數
一	二	二	三	四	四	五	〇	六	三	九	三	六
												七
												四

濠	波	伯	墨	加	希	諾	丁	葡
洲	刺	西	拿	陀	臘	威	抹	牙
洲	蘭	爾	哥	陀	臘	威	抹	牙

本表の外、外國に國籍を有せざる者七百九十九人、國籍不詳三人あり。本表には調査當日基隆碇泊の外國船乗組員をも含むを以て國籍數比較的多し。

一二 臺灣語を話す内地人

内地人にして臺灣語を話すもの、數は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に増加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に増加したるも、その内地人千に對する割合は、大正四年の百二十二人五分より、大正九年の百五人二分に減退したり。

年	總數		平均	
	男	女	男	女
明治三十八年	六、八一九	六、〇三〇	八〇元	一〇〇
大正四年	一六、五九一	一三、四〇三	二九元	一七元
同 九年	一七、七三三	一四、九六六	三三元	一七元

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

一三 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの、數は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に増加し、更に大正九年には九萬九千六十五人に増加したるも、尙ほ本島人千に對し、僅かに二十八人六分を算するに過ぎず。

年	總數		平均	
	男	女	男	女
明治三十八年	一、二七〇	一、〇八一	四六元	一〇〇
大正四年	五、三三七	五、〇一三	四二九元	四八二
同 九年	九、〇六五	八、七八七	二二六元	八七元

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

一四 婚姻、離婚、出生、死亡

臺灣に於ける最近十四年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、人口千に付婚姻は大正元年の十一人三分より大正十四年には九人三分に減少し、離婚は同しく一人五分より一人に減少し、出生は大體に於て増加の傾向あるも大正十四年には少しく減退して大正元年の四十一人九分より四十一人一分に低下せり。死亡は年に依り非常の相違あり、大正七年の如き三十八人八分の多きに達したるも、大正十四年には二十四人一分に減退したり。從つて出生の死亡超過數は年により甚だしき懸隔あり、大正七年の如き僅かに二萬人に過ぎざりしか、大正十四年には六萬八千人に達したり。

大正元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年
婚姻	三七,九一九	三六,一六七	三三,九七七	三八,五八六	三七,六〇四	三八,〇九五	四〇,九〇二
離婚	五,〇八二	五,一六〇	四,六六四	五,一九五	五,四四五	五,〇七八	四,九六八
出生(生産)	一四〇,四九八	一四一,三七九	一四六,一三六	一四二,五〇五	一三三,七七七	一四八,二〇九	一四五,一六二
死亡	八四,九六三	八六,六二〇	九七,五二一	一二三,二三三	一〇三,五一九	九七,九四九	一二四,六七七
自然増加 (出生超過)	五五,五三五	五四,七六九	四八,六一五	三〇,三八一	三二,一九八	五〇,二六〇	二〇,四八五

同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年
婚姻	四〇,九二五	四〇,八二九	三七,八三一	三九,四八〇	四二,一〇一
離婚	四,七二二	四,六五八	四,二二五	四,三三八	四,四五七
出生(生産)	一四七,三〇八	一六一,九八七	一六一,八二九	一五四,〇七八	一六六,一八三
死亡	一二九,四七七	九一,五二三	九五,三七二	八四,二〇八	九八,四〇五
自然増加 (出生超過)	二七,八三一	七〇,四七四	六六,四五七	六九,九七〇	六七,七七八

同 九年	四〇二	二七六	三五二	二六三	四二三	三四七
同 十年	四三二	二九七	三三二	二五四	三八五	三四九
同 十一年	四三三	三三八	三三三	二六四	三七四	三四三
同 十二年	三九六	四〇二	三三二	二五四	三五八	三四九
同 十三年	四〇〇	三八二	三四三	二七三	三四六	三四八
同 十四年	四二二	三八〇	三三〇	二六七	三九三	三四八

朝鮮、樺太、關東州(州内、州外、領事館)は同廳統計書に依り算出す。
北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依り算出す。

一六 死亡率

臺灣の死亡率は之を最近十四年間に就て觀るに、是れ亦高低常ならずと雖、大正十二年には著しく低下し、人口千に付二十一人六分を以て最低の記録を示せり。内地人の死亡率は之を本島人に比すれば甚だ低く、大正十四年には本島人二十四人八分なるに對し、内地人は僅かに十一人三分を示せり。
更に之を内地其他と比較するに、大體に於て死亡率の最も低きは關東州にして、北海道之に亞き、朝鮮は内地府縣と稍々一致し、我臺灣は樺太と相似たる所あり。又列國中死亡率の最も高きは、智利及洪牙利等にして大正十三年には智利二十九人二分、洪牙利二十人三分を示せり。

一 死亡率 (人口千に付)

大正元年	平均	内地人	本島人	外國人
同 二年	二五三	一五八	二五八	一五四
同 三年	二五三	一五三	二五八	一三一
同 四年	二八一	一五〇	二六七	一九五
同 五年	三三二	一七三	三三九	一九四
同 六年	二九二	一六〇	二九八	一六八
同 七年	二七五	一六五	二八〇	一七七
同 八年	三四八	一九六	三五五	二二七

同十年	二四四	一九八	二五七	一五二	一八二	二二九
同十一年	二五〇	二〇四	二〇三	一五六	一七六	二二五
同十二年	二二六	二〇五	二四六	一六〇	一七九	二二〇
同十三年	二四九	二〇四	二六〇	一五八	一六五	二二五
同十四年	二二一	二〇六	一八七	一六六	一九二	二〇三

朝鮮、樺太、關東州(州内、州外、領事館)は同應統計書に依り算出す。
北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依り算出す。

同八年	二七三	三〇七	三三二	三三七	二四九	二六四
同九年	三三三	三三九	三三二	三二六	二二九	二四六
同十年	二五三	二八〇	二八五	二八七	二五五	二七八
同十一年	二六二	二九三	二九五	二九七	二五〇	二七三
同十二年	三三三	三二一	三三九	一九七	二〇四	二〇八
同十三年	二九二	二九三	二八二	一九七	一九四	一九三
同十四年	二五三	二八〇	二八五	一九七	二〇四	一九八
同十五年	二六二	二九三	二九五	一九七	二〇四	一九八
同十六年	二七三	三〇七	三三二	三三七	二四九	二六四
同十七年	三三三	三三九	三三二	三二六	二二九	二四六
同十八年	二五三	二八〇	二八五	二八七	二五五	二七八
同十九年	二六二	二九三	二九五	二九七	二五〇	二七三
同二十年	三三三	三二一	三三九	一九七	二〇四	二〇八
同二十一年	二九二	二九三	二八二	一九七	二〇四	一九八
同二十二年	二五三	二八〇	二八五	一九七	二〇四	一九八
同二十三年	二六二	二九三	二九五	一九七	二〇四	一九八
同二十四年	三三三	三二一	三三九	一九七	二〇四	一九八
同二十五年	二九二	二九三	二八二	一九七	二〇四	一九八
同二十六年	二五三	二八〇	二八五	一九七	二〇四	一九八
同二十七年	二六二	二九三	二九五	一九七	二〇四	一九八
同二十八年	二七三	三〇七	三三二	三三七	二四九	二六四
同二十九年	三三三	三三九	三三二	三二六	二二九	二四六
同三十年	二五三	二八〇	二八五	二八七	二五五	二七八
同三十一年	二六二	二九三	二九五	二九七	二五〇	二七三
同三十二年	三三三	三二一	三三九	一九七	二〇四	二〇八
同三十三年	二九二	二九三	二八二	一九七	二〇四	一九八
同三十四年	二五三	二八〇	二八五	一九七	二〇四	一九八
同三十五年	二六二	二九三	二九五	一九七	二〇四	一九八
同三十六年	三三三	三二一	三三九	一九七	二〇四	一九八
同三十七年	二九二	二九三	二八二	一九七	二〇四	一九八
同三十八年	二五三	二八〇	二八五	一九七	二〇四	一九八
同三十九年	二六二	二九三	二九五	一九七	二〇四	一九八
同四十年	三三三	三二一	三三九	一九七	二〇四	一九八

大正元年
臺灣
朝鮮
樺太
關東州
北海道
内地府縣

二 内地其他との死亡率累年比較 (人口千に付)

一七 人口の増加

臺灣の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば、三百萬なりしものか、大正元年末には三百三十五萬に増加し、更に大正十四年末には四百萬に達し、過去十四年間に二割一分の増加を示せり。

更に人口増加の趨勢を内地其他と比較するに、増加の割合最も大なるは樺太にして、關東州之に亞き、北海道は第三位を占め、大正八年迄は臺灣と内地とは殆んど其の歩調を一にす。

一 最近十四箇年間の人口 (各年末現在)

年	總數	男	女	指數
大正元年	三,三三三,九四三	一,七六三,四八四	一,五九〇,四五九	一〇〇
二年	三,四一八,二七〇	一,七九四,八〇八	一,六三三,四六二	一〇二
三年	三,四六八,七一九	一,八一八,〇五六	一,六五〇,六六三	一〇三
四年	三,四八三,二六六	一,八二四,九四四	一,六六八,三三二	一〇四
五年	三,五〇〇,一一〇	一,八二四,一五〇	一,六八五,九六〇	一〇五
六年	三,五〇〇,〇五〇	一,八四六,四四五	一,七三三,六〇五	一〇六
七年	三,五八三,三九五	一,八五六,一七八	一,七二七,二二七	一〇七
八年	三,六三〇,三八五	一,八七八,八二〇	一,七五一,五七五	一〇八
九年	三,六七三,二九〇	一九〇二,七九〇	一,七〇〇,五〇〇	一〇九

同 十年 三,七五一,二二七 一九四一,五八二 一八〇九,六三五 一〇三

同 十一年 三,八二一,五三八 一九七四,八二四 一八四六,七二四 一〇四

同 十二年 三,八九一,九二二 二,〇〇八,〇九〇 一,八八三,八三一 一〇六

同 十三年 三,九五七,七〇六 二,〇三八,一八三 一九一八,五二三 一〇八

同 十四年 四,〇六一,五三四 二,〇八七,九一九 一九七三,六〇五 一一一

本表には蕃地の蕃社に居住する蕃人を除き、平地の蕃社に居住する蕃人は之を算入せり。

二 内地其他との累年人口指數 (各年末現在)

年	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
大正元年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
二年	一〇三	一〇四	一〇五	一〇五	一〇四	一〇一
三年	一〇三	一〇七	一三六	一〇七	一〇八	一〇三
四年	一〇四	一二〇	一四四	一二一	一一〇	一〇四
五年	一〇五	一二二	一五七	一二五	一二四	一〇五
六年	一〇六	一二四	一七六	一二二	一二〇	一〇七
七年	一〇七	一二五	一八九	一二九	一二五	一〇七
八年	一〇八	一二六	二〇一	一三七	一二九	一〇七
九年	一一〇	一二七	二二六	一五六	一三三	一〇六

同十年	二三	二八	二五	二五	二四
同十一年	二四	二九	二六	二六	二四
同十二年	二六	三三	三三	二六	二九
同十三年	二八	三三	三三	二六	二九
同十四年	三二	三九	三九	二七	二九

朝鮮、樺太、關東州(州内、州外、領事館)は同應統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。
 内地府縣及北海道の大正九年以後は十月一日現在なり。

一八 蕃 人

臺灣の蕃人は之をタイヤル、サイセツト、ブヌン、ツオウ、バイワン、アミ及ヤミの七種族に分つ。大正十四年末現在蕃社數は七百十六、戸數二萬二千九百三十九、人口十三萬六千人なるも、就中五萬七百六十八人は平地の蕃社に居住するか故に、實際蕃地に居住するもの、數は八萬五千九百三十八人なり。

各種族中人口最も多きはバイワン族にして、總人口の三割を占め、アミ族の二割八分、タイヤル族の二割三分等順次之に亞く。

種族	總數	男	女	百分比例
總數	一三六、七〇六	六八、三三三	六八、三九三	一〇〇
タイヤル	三三、五二八	一五、九四五	一六、五八三	二三・八
サイセツト	一、二二六	六二九	五九七	〇・九
ブヌン	一七、八四四	九、一六九	八、六七五	一三・〇
ツオウ	二〇、三〇〇	一〇、七七七	九、五二三	一五
バイワン	四一、九四一	二〇、九七七	二〇、九六四	三〇・七
アミ	三九、五四三	一九、六八三	一九、八六〇	二八・九
ヤミ	一、五九四	八三三	七六一	一・二

本表中、平地の蕃社に居住する蕃人五萬七百六十八人は本島人として人口統計に計上せらる。

澎湖廳	花蓮廳	臺東廳	高雄州	臺南州	臺中州	新竹州	臺北州	全島
1	1	1	7	0	2	8	9	5
2	3	4	1	1	1	1	1	9
1	1	1	1	1	1	1	1	5
1	1	1	4	8	0	4	5	3
4	1	1	0	5	5	3	3	7
1	8	2	1	1	1	1	1	9

本表は昭和元年十二月末現在なり。

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り、地方官官制に根本的改正を加へ、從來の十二廳を五州二廳に改めたりしも、大正十五年七月一日復た澎湖廳を設置して三廳となし現に五州は之を五市四十五郡に分ち、郡の下には三十一街、二百二十二庄を置き、三廳は之を九支廳に分ち、支廳の下には三街五庄十九區を置く。

一九 行政區劃

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り、地方官官制に根本的改正を加へ、從來の十二廳を五州二廳に改めたりしも、大正十五年七月一日復た澎湖廳を設置して三廳となし現に五州は之を五市四十五郡に分ち、郡の下には三十一街、二百二十二庄を置き、三廳は之を九支廳に分ち、支廳の下には三街五庄十九區を置く。

内地府縣との面積比較

熊	宮	山	高	三	愛	千	和	花	新	臺	京	鳥	臺
本	中	城	口	重	媛	南	歌	蓮	竹	北	都	取	東
縣	州	縣	州	縣	州	縣	縣	縣	州	州	府	縣	廳

面積	四二八九	四七八七	四七二四	三九四六	三七四八	三六九七	三六九五	三五五一	三三九六	三〇六八	三〇〇二	二九八六	二九六〇	二九五五	三六九四	三四八三
----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

順位	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇
----	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

佐賀縣

順位は、一道三府四十三縣及州、廳の面積の順位を示す。

一 佐賀縣の人口 (大正十四年)

佐賀縣の人口は、大正十四年調査の結果、一五八、〇〇〇人である。これは、前年調査の結果、一五七、〇〇〇人から、一〇、〇〇〇人増加したものである。この増加は、佐賀縣の人口の増加を示している。佐賀縣の人口は、大正十四年調査の結果、一五八、〇〇〇人である。これは、前年調査の結果、一五七、〇〇〇人から、一〇、〇〇〇人増加したものである。この増加は、佐賀縣の人口の増加を示している。

二 佐賀縣の人口

二 州及廳の人口

五州二廳中、人口の最多なるは臺南州の百四萬三千八にして、臺中州は八十七萬九千人を以て之に亞き、以下臺北、新竹、高雄、花蓮港、臺東の順序を以てし、一方里の人口は臺北州四千七百五人を以て最高度を示し、臺東廳の六百六十六人最も低し。今之を内地府縣に比較すれば、臺南州は宮城、秋田の中間に、臺中、臺北の兩州は岩手、青森の中間に、新竹、高雄の兩州は福井、沖繩の中間に位し、花蓮港及臺東の兩廳は、人口餘りに少くして比較すへき類似の府縣なし。

一 州及廳の人口 (大正十四年末現在)

全	實數	百分比例	平地面積 (蕃地ヲ除外)	一方里に付人口	全面積
臺北	四〇六、五二四	一〇〇	三、二六五	一七七八	一、七七八
新竹	八三、六九〇	二〇五	四、七〇五	二、八三四	二、八三四
臺南	六二〇、七六一	一五〇	三、五〇二	二、〇八八	二、〇八八
高雄	八七九、三三八	二二六	三、八二四	一、八七一	一、八七一
花蓮港	一、〇四三、四四五	二五七	三、二五九	二、九七二	二、九七二
臺東	五九一、八三七	一四六	三、〇五八	一、六三三	一、六三三
花蓮港廳	四三、一八九	一一	六、六六	二、四	二、四
臺東廳	五九、二九四	一五	六、七	二、三〇	二、三〇

本表には蕃地の蕃社に居住する蕃人を含みます。但し一方里に付人口の全面積には、蕃地居住の蕃人をも加へて算出せり。

二 内地府縣との人口比較

(大正十四年) (括弧内の數字は十月一日現在) (大正十四年末現在)

宮城縣	臺南縣	秋田縣	岩手縣	臺北縣	青森縣	福井縣	新竹縣	高雄縣	花蓮港縣	臺東縣
一、〇四四、〇三六	一、〇三九、六八〇	九三六、四〇八	九〇〇、九八四	八六六、二四七	八二五、二〇八	五九七、九三八	五九七、七三二	五八四、二六四	五五七、六三三	四二六、六七七
(一、〇四三、四三五)	(八七九、三三八)	(八三三、六九〇)	(八三三、六九〇)	(八三三、六九〇)	(八三三、六九〇)	(六二〇、七六一)	(五九一、八三七)	(五九一、八三七)	(五九一、八三七)	(四三、一八九)

内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

臺灣には五市、三十四街あり。就中人口二萬以上の市及街は二十二にして、その第一位を占むるは臺北市の二十萬、之に亞くは臺南市の八萬六千、基隆市の六萬五千、嘉義街の四萬五千、高雄市の四萬四千、臺中市の四萬二千、新竹街の三萬八千等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東街は僅かに八千八百、同しく花蓮港街は八千を有するのみなり。(大正十四年末現在)

次に州及廳並に郡役所の所在地たる五市、三街を内地其の他の都市に比較するに、大正十四年十月一日現在に依れば、我か臺北市は大阪、東京、名古屋、京都、神戸、横濱、京城、廣島の八市に亞ひて實に第九位を占め、長崎市の上に位し、臺南市は平壤、靜岡兩市の中間に、基隆市は松本、福井兩市の中間に、高雄市は秋田、郡山兩市の中間に、臺中市は福島、四日市兩市の中間に、新竹街は沼津、戸畑兩市の中間に位す。而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樺太の首府豊原よりも少し。

二二 主要都市

一 主要都市の人口 (大正十四年末現在)

	總數	内地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	二〇一、三三四	一四八、八四三	一三三、二〇一	一三、三三〇	一
臺南市(臺南州)	八六、七三六	一三、五三三	七〇、〇七四	三、〇八九	二
基隆市(臺北州)	六五、三三七	一六、六八五	四三、一九〇	三、四三二	三

北港街(同)	西螺街(臺南州)	馬公街(高雄州現在)	淡水街(同)	宜蘭街(臺北州)	南投街(同)	埔里街(同)	豐原街(同)	員林街(臺中州)	麻豆街(臺南州)	清水街(臺中州)	屏東街(高雄州)	斗六街(臺南州)	大溪街(新竹州)	鹿港街(臺中州)	新竹街(新竹州)	臺中市(臺中州)	高雄街(高雄州)	嘉義街(臺南州)
二〇,〇九二	二〇,二三四	二二,二九六	三三,三七七	三三,四六七	三三,七六六	三三,八八四	三四,一〇〇	三四,四〇七	三五,二二三	二六,三三一	二六,九四四	二七,二一五	二七,八三三	三三,三九七	三八,五七一	四三,三八七	四四,〇三五	四四,八四二
七四五	一七八	二,五五五	八〇四	一九四八	八三二	八七二	五七〇	五九八	六〇〇	三三一	三,三二五	九七三	三,六六六	三三九	四,一六九	一〇,九六八	一〇,六六六	六,八六〇
一九,二〇七	一九,八七四	一八,六九五	二二,一九四	二〇,二六二	二二,八九八	三三,八五〇	三三,五一八	三三,六六九	二四,六〇七	二五,九六七	三三,八七三	二六,〇〇〇	二七,四〇四	三三,〇二六	三三,九八八	三〇,五一五	三二,四六七	三七,八八二
一四〇	七三	三九	二五七	二六	一三三	一三三	一五二	二五	四四	七六	一四	一五	四四	九〇	九三	九三	一〇,九九	
三	二	三	九	八	七	六	五	四	三	三	二	一	〇	九	八	七	六	五

廣 臺 長 釜 濱 平 臺 靜 松 基 福

島 北 崎 山 松 壤 南 岡 本 隆 井

臺東街(臺東廳) 八八四九
 花蓮港街(花蓮港廳) 八〇〇三
 本表には、人口二萬以上の市及街のみを挙げ、且つ廳所在地たる臺東、花蓮港兩街を掲ぐ。

二 内地其の他の都市との人口比較

(大正十四年十月一日現在) (括弧内の數字は大正十四年末現在)

人口	一五,七三二	一九五,五五五	一八九,〇七一	一〇六,七五九	九二,二五二	八九,二四四	八四,八四二	八四,七三二	六三,四三七	六二,二八五	五九,九四三
	(一〇一,三七四)	(八六,七三六)	(六五,三七七)								

花 臺 豐 戶 新 沼 四 臺 福 郡 高 秋 仁
 運 原 日
 港 東 太 畑 竹 津 市 中 島 山 雄 田 川

朝鮮、樺太は同廳國勢調査速報に依る。
 内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

五、六、二、九、五
 四、三、八、八、五
 四、三、七、五、一
 四、一、九、八、四
 四、一、三、七、九
 四、一、一、二、五
 四、〇、三、九、三
 三、八、〇、四、二
 三、七、七、七、五
 三、七、七、四、八
 二、一、七、八、三
 八、八、七、九
 七、八、二、七
 (四、〇、三、五)
 (四、一、三、八、七)
 (三、八、五、七、一)
 (八、八、四、九)
 (八、〇、〇、三、一)

二二三 農業戸數

臺灣の農業戸數は三十九萬戸にして、總戸數の約五割五分を占め、農業者一戸當平均耕地面積は約二町(二甲)に當る。

今之を内地其他と比較するに、總人口に對する農業戸數の割合最も大なるは、朝鮮の七割六分にして、臺灣は第三位を占め、樺太は僅かに二割三分四厘を以て最下位に在り。農業者一戸當平均耕地面積の最も大なるは、北海道の四町六段にして、關東州の三町一段、樺太の二町三段之に亞き、臺灣は第四位を占め、内地府縣は一町歩を以て最下位に在り。

臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
三九三、七七七	二、七四二、七〇三	八、七五五	六三、〇三九	二七二、一八九	五、三七七、四二〇
五五〇	七六〇	二三四	六一二	三六五	四六六
二〇	一六	二三	三二	四六	一〇

本表は大正十四年末の事實なり。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、州外)は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

本表は大正十四年末の事實なり。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、州外)は同應統計書に依る。
 北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

二四 耕地面積

臺灣の耕地は總面積の二割餘を占め、其の面積は七十八萬二千町步(七十九萬九千甲)にして内、田三十七萬六千町步(三十八萬五千甲)畑四十萬五千町步(四十一萬四千甲)なり。今之を内地其の他と比較するに、耕地面積の總面積に對する割合の最大なるは、關東州の五割二分三厘にして、臺灣は之に亞き、朝鮮の一割九分五厘はその第三位を占む。耕地の内、田の割合畑より大なるは内地府縣のみにして、樺太の如きは全然田を有せず。

總數	耕地面積		百分比例	
	田	畑	田	畑
臺灣	七九,九二八町	三七六,七四一町	四八・三	五八・八
朝鮮	四三四,八三五	一五三,七三六	三六・〇	六四・〇
樺太	一九,九八〇	—	—	一〇〇・〇
關東州	一九六,〇八一	一四三,一一一	〇・七	九三・三
關東州	七六,三三七	一三六,〇一一	一七・三	八二・八
北海道	五二八,〇六八	二,九六六,〇一一	五・三	四三・八
内地府縣	—	—	—	—
合計	—	—	—	—

二五 水利

臺灣に於ける埤圳の数は、八千五百七十八にして内、水利組合百三、公共埤圳三、認定外埤圳八千四百七十二なり。又其の灌溉面積は三十六萬一千甲にして内、其の五割二分は水利組合の灌溉に屬す。

	埤圳數	灌溉排水面積	灌溉面積 百分比例
總數	八,五七八	三六,一四六 ^甲	一〇〇
水利組合	一〇三	一九,五〇八	五三
公共埤圳	三	八〇,一九二	三三
認定外埤圳	八,四七二	九〇,七六六	二五

本表は大正十五年四月一日現在の事實なり。
本表の外事業計畫中の組合一あり。

二六 農 産

臺灣の農産物は、大正十四年中の總生産價額二億六千九百萬圓にして内、普通作物一億八千七百萬圓、特用作物六千百萬圓、園藝作物二千百萬圓なり。
 更に之を作物別に觀るに、米は一億六千萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は四千七百萬圓を以て之に亞き、甘藷の二千二百萬圓、蔬菜類の九百萬圓、芭蕉バナの七百八十萬圓、茶の七百二十萬圓、落花生の二百九十萬圓、豆類の百八十萬圓、柑橘の百五十萬圓等順次之に亞く。

總 類	生産價額	生産價額 百分比例	作付面積	收穫高
普通作物	二六九、八三三、〇六七	一〇〇・〇	—	—
米(玄米)	一八七、二二一、三三八	六九・四	—	—
甘 藷	一六二、四三七、八八五	六〇・三	五、七、四、六、五	六、四、四、三、一、六、三、石
豆 類	三三、三六一、三八一	八・三	二、三、六、七、〇	一、九、〇、八、九、一、四、六、三、六、斤
小 麥	一、八六七、一四	〇・七	二、四、六、六、六	九、三、二、六、六、石
其 他	一〇六、二六六	〇	九、六、三	五、二、五、六、石
特用作物	三、四、八、六、八、二	〇・二	—	—
甘蔗	六、一、二、五、一、九、一、五	三三・七	—	—
甘 蔗	四、七、八、七、一、八、三、八	一七・七	一、三、〇、三、七、二	八、八、三、九、八、三、一、八、九、三、斤

茶 花	落 草	煙 草	黃 麻	苧 麻	胡 麻	藍 麻	其 他	園 藝 作 物	芭 蕉	柑 橘	龍 眼	檳 榔	鳳 梨	榎 仔	李 子	蔬 菜	其 他	
七、二、四、三、五、九、二	二、九、四、八、四、八、七	五、一、四、一、六、二、八	七、六、七、七、三、〇	七、三、三、五、〇	三、四、〇、二、八、九	一、八、三、四、四、五	六、五、八、三、八、六	二、三、三、一、八、二、四	七、八、〇、四、二、四、九	一、五、八、一、五、三、九	五、九、七、八、八、七	二、四、五、三、三、九	六、八、四、五、七、〇	一、五、四、四、六、五	一、六、六、五、六、六	九、八、八、二、六、〇、二	二、〇、五、六、一、七	一、五、一、〇、〇、〇
二・七	一・一	〇・三	〇・三	〇・三	〇・一	〇・一	〇・二	七・九	二・九	〇・六	〇・二	〇・一	〇・三	〇・〇	〇・〇	〇・一	〇・一	〇
四、四、七、八	二、六、〇、八、一	七、七、五	二、三、六、〇	一、七、三、〇	四、三、三、〇	一、五、九、七	—	一、七、五、六、八	二、八、二、三	二、四、七、五	五、八、九	二、一、八、四	三、三、五	三、三、五	—	—	—	—
二、〇、九、四、四、九、斤	四、八、〇、〇、四、石	一、六、六、六、〇、四、六、斤	五、九、四、二、四、一、〇、斤	二、一、〇、一、三、五、斤	二、二、四、六、八、石	二、〇、四、五、三、六、八、斤	—	二、六、七、六、四、一、〇、三、斤	三、三、六、三、三、〇、五、斤	一、六、九、一、五、八、八、八、斤	五、五、三、三、九、〇、四、斤	一、四、一、二、八、四、六、二、箇	四、八、〇、七、六、二、八、斤	六、一、七、〇、二、八、九、斤	—	—	—	—

二七 畜 産

臺灣の畜産物生産總價額は、大正十四年に三千八百萬圓を算し内、家畜生産三千二百八十萬圓、家禽生産四百九十七萬圓、牛乳四十萬圓なり。
 家畜生産中、豚は二千九百八十萬圓を以て第一位を占め、水牛の百九十萬圓之に亞き、家禽生産中第一位を占むるは鶏の三百八十萬圓なり。

總 家	水 牛	黃 牛	其 他 的 牛	豚 羊	山 羊	其 他	家 禽	鷄
總 額	生 産 價 額	生 産 價 額	生 産 價 額	生 産 價 額	生 産 價 額	生 産 價 額	生 産 價 額	生 産 價 額
三、一六七、五五三	一、九五〇、七六六	六四五、九九九	一、五三、六五九	二、九八三、二八七	二〇〇、五二二	一、六、二七一	四、九七一、〇二五	三、八七三、一〇七
一〇〇.〇	八五.九	五.一	一七	七六.二	〇.五	〇	一三〇.〇	一〇.一
三、七九二、四二三	三、七九二、四二三	三、七九二、四二三	三、七九二、四二三	三、七九二、四二三	三、七九二、四二三	三、七九二、四二三	三、七九二、四二三	三、七九二、四二三
七五、四三三	七五、四三三	七五、四三三	七五、四三三	七五、四三三	七五、四三三	七五、四三三	七五、四三三	七五、四三三

鳥 七 面 牛 乳

三、七、六、八〇
一、四、八、六六
四〇、一、二五

〇九
〇〇
一・一

二八 林 産

臺灣の林産物生産總價額は、大正十四年に一千二百八十萬圓を算し内、官行生産價額三百四十萬圓、一般生産價額九百三十萬圓なり。
官行生産價額中第一位を占むるは丸太の二百四十萬圓にして、一般生産價額中にては薪の三百萬圓第一位を占む。

品名	價 額	價額百分比例
總 額	一、二、七、九、八、五	一〇〇
官行生産價額	三、四、三、〇、三	二六八
丸 太	二、四、五、一、四、五〇	一九一
製 材	九、九、四、一、九	七三
副生品及副産物	五、一、一、五、四	〇・四
一般生産價額	九、三、五、七、八、〇二	七三二
木 材	二、四、五、九、七、七二	一九三
竹 材	一、〇、六、六、〇、三九	八・四
籐 材	二、五、六、八、九一	二〇
木 炭	一、三、四、六、五、三二	一〇・五
薪 炭	二、九、九、四、四、三四	二三・四
筍	八、七、四、六、八	六六

蓮 五〇、七五〇
 薯 三二、六五三
 姜 一六九、九七三
 其 他 一四四、二九七
 草 一〇、〇〇〇
 椰 〇、〇〇〇
 黃 〇、〇〇〇
 官行生産價額は營林所に於ける賣拂價額にして、大正十四年度の事實を掲上せり。

二九 鑛 産

臺灣の鑛産總價額は、大正十四年に一千四百六十萬圓を算し内、石炭は總産價額の八割八分、即ち一千三百萬圓を以て第一位を占め、金銅鑛は五十八萬圓を以て之に亞き、金の三十七萬圓、石油の二十七萬圓等順次之に亞く。

産 額	價 額	價額百分比
石 炭 一七〇、五八噸	一四、六七、三三四	一〇〇
石 油 二一、〇三七石	二、九八、七六八	八八九
沈 澱 七九、三四八斤	三七〇、〇九七	二六
金 銅 五、八八二、六六三貫	六〇、八七一	〇四
石 鑛 四、三三七、四三斤	二七、八、三六八	一九
硫 黃 五、八八二、六六三貫	五八二、六八二	四〇
銀 金 四、三三七、四三斤	七、八、四一七	〇五
砂 金 九六、二三四匁	一八、五七四	〇一
天然揮發油 一、二四一匁	四、五五一	〇
總 額 七二七、五石	二三五、〇〇五	一六

三〇 水 産

臺灣の水産總價額は、大正十四年には一千七百七十萬圓以上に達し内、水産漁獲物一千萬圓、養殖場漁獲物三百十六萬圓、水産製造物三百五十八萬圓、製鹽九十二萬圓なり。
 更に之を品目別に観れば、鯉節の二百五十萬圓第一位を占め、虱目魚サツバシロイの二百萬圓、鯉の百九十萬圓、鮪の百十七萬圓、鯛の百十五萬圓等順次之に亞く。

水産漁獲物	總額	價額	價額百分比
鯛	一七、七〇五、四九六	一〇〇〇	五・六七
鯉	一〇、〇三二、四二七	一、一五〇、四一九	六・五
鮪	一、九〇三、三七二	一、九〇三、三七二	一〇・八
鯉節	八九八、八五〇	八九八、八五〇	五・一
鱈	五七六、三五	五七六、三五	三・三
鰻	二二五、九九二	二二五、九九二	一・二
鱈	四一四、二〇二	四一四、二〇二	二・三
鮪	一、二七二、八八五	一、二七二、八八五	六・六
鮪	一、六九、七〇五	一、六九、七〇五	一・〇
黃花魚	二二六、七二四	二二六、七二四	〇・七

製 其
鹽 他

二〇七、一三六
九六、二三五

一、二
五、二

鹽	鱈	鰵	カ	浦	煮	鹽	水	其	鮫	烏	オ	オ	草	サ	鱈	風	養	其
魚	鱈	仔	ラ	ス	干	節	産	他	魚	魚	魚	仔	魚	魚	魚	場	獲	他
							製									漁	物	
							造									獲		
							物									物		

八四、一〇四	九〇、一一〇	五五、四〇四	一六三、九〇八	四八九、〇三一	二四九、〇九八	三、五八一、二〇一	一四一、八五三	一一七、七六五	一二五、四九四	三四六、九五六	一九五、七二五	二二三、三五九	二〇四、六一一	三、一六六、七五三	三、四〇二、九六三
--------	--------	--------	---------	---------	---------	-----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	-----------	-----------

〇、五	〇、五	〇、三	〇、九	二、八	一、四〇	二、〇	〇、八	〇、七	〇、七	二、〇	一、一	一、三	二、三	一、七九	一、九二
-----	-----	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------

三一 工業 產

臺灣の工業總生産價額は、大正十四年に二億四千二百萬圓を算し内、砂糖の一億六千二百萬圓は群を抜いてその第一位を占め、再製茶の一千百萬圓、酒精の六百萬圓、調合肥料の四百萬圓等順次之に亞く。

品名	生産價額	生産價額 百分比例
總 額	二四二,一八一,八〇三	一〇〇
砂 糖	一六二,二八七,二六五	六七〇
酒 精(稅拔)	六,〇〇六,三二〇	二五
再 製 茶	一一七,七三,四一四	四九
原動機及其附屬機械類其他	二,一九七,九一八	〇九
木 製 品	三,七三二,三五二	一五
セメント	二,九一九,四六五	一二
染 色 類	一,九五六,一八八	〇八
麵 類	二,八六一,二五七	一二
煉瓦(耐火)	一,五七五,九八四	〇六
調合肥料	四,〇七三,七〇四	一七

金銀細工	一,八四四,三九九	〇八
味噌及醬油	二,一六六,一九三	〇九
植物性油	三,〇三六,三五五	一二
及同油槽		
敷瓦及屋根瓦	九八八,四四六	〇四
金 銀 紙	一,四四一,二一六	〇六
製 粉	二,三二五,〇八四	〇九
綿布、麻布類	二,六三三,四三四	一一
糖 蜜(稅拔)	二,五〇八,〇八二	一〇
帽 子	三,六八五,四二七	一五
靴 類	一,一〇八,二二九	〇五
板 狀 樟 腦	一,六三二,二六五	〇七
竹 細 工	一,一六五,七五八	〇五
鳳 梨 罐 詰	一,六七二,二二九	〇七
其 他	一,六六四,三七〇	六九

三三糖業

臺灣の糖業は大正十五年期に於て、公稱資本額二億六千萬圓、作業工場數百九十八、作業能力四萬二千噸を有し、其の製糖高八億三千三百萬斤に達す。就中新式製糖會社の數は十三にして作業工場數四十七、作業能力三萬九千噸を有し、その製糖高八億一千一百萬斤を算す。

總數	公稱資本金	作業工場數	作業能力	製糖高	製糖高百分比
新式製糖會社	二六八、六六六	一六	四、二五四	八三、二〇九、六六五	一〇〇
臺灣製糖	二五九、九五〇	四七	三九、四三四	八一、三四四、六〇〇	九七
東洋製糖	六三、〇〇〇	一〇	九、〇七八	二〇六、三六二、二九八	二四九
明治製糖	三六、二五〇	六	五、四五四	一〇四、八二六、五五〇	一二六
帝國製糖	三七、五〇〇	五	五、三七〇	一一五、五四二、一四〇	一四〇
新高製糖	一八、〇〇〇	五	三、三三四	九〇、一一七、三〇〇	一〇八
鹽水港製糖	二八、〇〇〇	三	三、二八四	五二、六五六、五〇〇	六三
大日本製糖	二五、〇〇〇	七	五、〇四〇	九三、三五〇、六〇五	一一〇
臺南製糖	二七、二五〇	二	三、五八四	八六、六四〇、〇〇〇	一〇四
新竹製糖	九、〇〇〇	三	一、三二〇	一四、四〇三、二〇〇	一七
總計	七五〇〇	一	五六〇	四、二七七、〇〇〇	〇五

林本源製糖	三、〇〇〇	一	八四〇	二六、〇六八、一〇〇	三二
沙撈越製糖	二、五〇〇	一	三三六	四、八三五、八〇〇	〇六
臺東製糖	一、七五〇	二	三九二	三、三五一、九三七	〇四
新興製糖	一、二〇〇	一	九五二	八、九五四、七五〇	一一
改良糖廠	八、七六六	一五	一、三六〇	一〇、四三三、八八八	一二
舊式糖廠	?	一六	一、三六〇	一一、四二二、二七七	一四

大正十五年期とは大正十四年十一月より同十五年十月に至る期間を云ふ。

三三 貿易

臺灣の貿易は之を外國貿易及内地貿易(臺灣内地間貿易)の二種に分つへきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進みたり。然るに大正二、三の兩年は砂糖の減産と一般商況の不振に依り少しく減退したるも、大正五年には世界大戰の影響を受けて、一億七千七百萬圓に達し、大正六年には二億圓臺に上り、大正八年には更に三億圓臺を突破せり。然るに大正十年及同十一年には世界經濟界の不況に伴ひ再び二億七、八千萬圓に減退したりしも、大正十二年には復た三億圓臺に上り、大正十四年には四億五千萬圓に達し、人口一人當百十圓を算せり。

次に貿易總額に對する内外兩貿易の割合を觀るに、内地貿易は常に過半數を占め少きも七割、多きは七割八分に達す。

一 貿易總表

年	總額	指數	百分比例		平均一人當
			外國貿易	内地貿易	
大正元年	千円 一五,四四四	一〇〇	三,四二七	九,一五七	七三
同二年	千円 二四,二四八	九一	三〇,九六六	八,三三二	七二
同三年	千円 二二,六三三	八九	二五,九六六	八,五三三	七三

二 外國貿易

年	總額	指數	輸出	輸入	輸入超過
同四年	二九,〇三三	一〇三	一〇〇,八二一	二二九	七八一
同五年	一七,七三〇	一四一	一三〇,二八七	二六五	七三三
同六年	二三四,六一	一八七	一七三,三七六	二六・一	七三九
同七年	二四三,五七六	一九四	一七六,六二七	二七五	七三五
同八年	三三三,五三六	二六五	二二二,七八一	三〇・〇	七〇〇
同九年	三八七,七〇三	三二〇	二九三,一六二	二四六	七五四
同十年	二八六,三九三	三三八	二二二,四一八	二三三	七七七
同十一年	二七六,九六〇	三三一	二〇九,四七五	二四四	七五六
同十二年	三〇八,七二四	二四六	二四〇,四六〇	三三一	七七九
同十三年	三八六,七〇〇	三〇八	二九七,七〇〇	三三〇	七七〇
同十四年	四四九,六一〇	三五八	三四五,一五五	三三二	七六八
大正元年	千円 三〇,二六七	一〇〇	一四,九六〇	一九,三〇七	四,三四七
同二年	千円 三〇,九六六	九〇	一三,九四二	一八,〇二四	五,〇八一
同三年	千円 二五,九九六	七六	一三,九八二	一三,〇一四	三
同四年	千円 二八,二二三	八三	一五,四三〇	一三,七八二	二,六四九
同五年	千円 四七,〇八三	一三七	三二,六三三	一五,四三〇	(1) 一六,三三三

三四 對手國別外國貿易

臺灣の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中支那は累年主要の地位に在り。即ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割八分五厘、多きは五割五分を占め、輸入貿易に於ては更にその割合大にして、少きも三割四分、多きは五割七分を占む。

今大正十四年の外國貿易に就て觀るに、貿易總額一億圓中、輸出額は四千七百萬圓にして、就中支那の二千六百萬圓最も多く、總額の五割五分に當り、北米合衆國の七百萬圓、香港の五百萬圓、蘭領印度の四百萬圓等順次之に亞く。輸入額五千六百萬圓中第一位を占むるは支那の三千萬圓にして、總額の五割四分に當り、英吉利の五百三十萬圓、英領印度の三百八十萬圓、蘭領印度の三百四十萬圓、北米合衆國及波斯の各二百二十萬圓等順次之に亞く。

一 輸出

總額	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同元年
總額	千円 四七,九六六	千円 四二,五七六	千円 二九,一五二	千円 三〇,五六二	千円 二二,五四一	千円 三二,一七二	千円 一四,九六〇
關東州	一,二八八	八六一	七三二	六二二	二五八	三四	三三
支那	二六,三四七	三三,一五四	一〇,五六六	一〇,三〇〇	九一七八	二,八九三	四,二六四
香港	五,〇四四	五,七六六	四,一七一	四,三三二	四,五六九	六,〇三三	三,九三
蘭領印度	四,〇〇五	三,五四〇	三,一八九	三,二九四	三,〇六五	二,八九一	三三

二 輸入

暹羅	英領印度海峽植民地及英領ボルネオ	比律賓諸島	佛蘭西	獨逸	英吉利	北米合衆國	其他	總額
九六六	五三三	四六三	六五九	一三四	一,〇三二	七,〇四〇	四七五	大正十四年 千円 五五,四八九
一,三九三	三三二	六〇一	八〇九	三三四	一,二六八	五,二五七	四九〇	同十三年 千円 四六,四四四
一,一九二	一八四	三九四	一,〇四九	二四	八四二	六,五九七	二七三	同十二年 千円 三九,一一一
一,〇〇三	二二〇	四二	三三二	一八五	一,〇三三	七,六九一	一一二	同十一年 千円 三六,九三三
六二九	三五六	四四五	二二二	六	二〇五	三,三三一	一一八	同十年 千円 四〇,四三三
五三七	六六二	二,〇二二	三三五	〇	一,三五九	六,八三三	二,五四四	同九年 千円 六〇,三六七
一	三四五	五二	六八二	一,五七三	一,〇八七	四,九一七	一,六二三	同元年 千円 一九,三〇七
								同十一年 千円 三六,九三三
								同十年 千円 四〇,四三三
								同九年 千円 六〇,三六七
								同元年 千円 一九,三〇七

海峽植民地及英領ホルネオ	二三八	二六八	一四四	九三	二七	一四三	五
濠太刺利	五〇六	一、一七五	六二二	一八五	八八	七六	三三
波逸斯	二、二二四	一、三〇六	三九二	五六六	九三六	二、九九四	一、四三五
獨逸	一、七三三	六七四	五三三	三二	二六	一	一、〇七二
英吉利	五、三三三	二、八八五	一、九五八	一、四六五	一、九八九	九八	三、四九〇
北米合衆國	二、二二八	三、五〇五	六、三七二	三、三〇一	四、九八九	五、五六七	一、七〇〇
英領アメリカ	六九七	六七一	二九六	五三二	一五四	五七七	一
其他	二、五七六	二、一五九	一、六四四	四、三七二	一、七六九	四、〇三二	五、五四

三五 支那、香港及南洋貿易

臺灣の外國貿易中、臺灣と最も密接の關係を有する支那、香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、大體に於て常に重要な地位を占む。即ち大正十四年に就て觀るに、輸出額は三千七百萬圓にして、輸出貿易總額の約七割八分を占め、輸入貿易は三千九百萬圓にして、輸入貿易總額の七割に當れり。

		一 輸 出		二 輸 入	
總額	支那	香港	南洋	總額	支那
大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年
同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同元年
千圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
三、七六〇八	三、三八六一	一、九七六一	一、九六九七	一、八七五九	二、四一七五
三、三三三	三、二一五四	一、〇、五五六	一、〇、三〇〇	九、二七八	二、八九三
五、〇四四	五、七六六	四、一七二	四、三三三	四、五六九	六、〇三三
六、二二七	五、九四二	五、〇六三	五、〇七四	五、〇二二	六、二五九
本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ホルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度、暹羅及濠太刺利を謂ふ。以下同し。					
大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年
同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同元年
千圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
三、九六五	三、二〇六	二、四四〇三	三、八〇八	二、九二四七	四、三三〇
三、〇、五七二	二、六三七	一、七四六	一、八三九	一、九四六	二、八七四
					六、七三七

香港南洋

三比例

107	71	89	71	124	71	129
906	787	687	558	958	1359	3056

外國貿易總額に對する割合

支那、香港、南洋貿易總額に對する百分

大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		同十五年	
總額	支那	香港	南洋	總額	支那	香港	南洋	總額	支那	香港	南洋
797	390	194	213	731	481	194	213	731	481	194	213
644	337	141	186	644	337	141	186	644	337	141	186
678	361	143	194	678	361	143	194	678	361	143	194
795	520	135	167	795	520	135	167	795	520	135	167
784	549	105	131	784	549	105	131	784	549	105	131
703	489	144	167	703	489	144	167	703	489	144	167
1000	688	204	267	1000	688	204	267	1000	688	204	267
1000	701	134	165	1000	701	134	165	1000	701	134	165

三六 重要品別外國貿易

臺灣の外國貿易中輸出品の主要なるものは、茶、石炭、砂糖、樟腦、酒精等なり。今大正十四年に就て之を觀るに、茶は一千四百四十萬圓を以て第一位を占め、石炭の七百四十萬圓、砂糖の五百九十萬圓、樟腦の三百六十萬圓等順次之に亞く。

次に輸入品の主要なるものは、豆油槽、砂糖、阿片、木材及板、硫酸アンモニウム、ガソリン、石油、豆類等にして、大正十四年には豆油槽の千六百七十萬圓第一位を占め、硫酸アンモニウムの五百四十萬圓、砂糖の四百五十萬圓、豆類の三百七十萬圓、阿片及ガソリンの各二百八十萬圓、木材及板の百八十萬圓、米の百五十萬圓、石油の百三十萬圓、包席の百二十萬圓等順次之に亞く。

一輸出

品名	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同元年
茶	2,464,000	1,050,000	1,000,000	953,000	795,000	640,000	667,000
砂糖	5,903,000	6,014,000	2,400,000	2,832,000	2,325,000	696,000	1,729,000

煙草	豆類	紙類	小麥	硫酸アンモ ニウム(粗製)	ガンニ-囊(故共)
八五五	三、七七〇	七、三八	九八八	五、四七	二、七九五
九八八	三、二二八	八、五〇	一、四四七	一、八二五	一、七六四
四二七	二、五七六	七、七三	九六八	九一九	一九九
九〇一	二、九〇八	八、六三	三、九	三、九	三、九
八五七	一、四九三	一、二七六	一、三九	三、九	三、九五
一、七三四	一、八四四	一、二八七	六	一	七、六
九〇七	三、九	五、九四	一	一	一〇〇

石炭	樟腦	燐寸	綿織物	乾魚及鹹魚	セメソ	芋	酒	錫及乾鳥賊
七、四八	三、六〇九	五、一八	三、七六四	一、九四三	一、三三九	四、九七	一、九八七	二、四六六
七、三〇五	二、六三七	五、二八	一、四八六	二、八五三	七、九	四、五二	一、六二二	一、五八九
五、六九五	三、三〇五	一、三七	四、五四	五、六五	六、五二	三、六五	一、三〇〇	五、三
五、七一九	四、四一八	二、六八	一、二六七	五、九六	一、二〇七	四、〇六	六、五二	五、
六、五八二	二、八〇	五、四	一、三〇三	九、七	一、九五	四、五	五、七	三、
八、九八二	四、三三五	一、三六四	二、二七一	七、八五	三	六、八	三	一、八
一、二八	四、五〇〇	一、二八	九、九	一、七	一	三、七九	一	三、七九

輸 入

豆油	阿片	砂糖	米	木材及板	石油	包
一、六七六	四、五八五	二、八二七	一、五三七	一、八二五	一、三〇八	一、二三四
三、六八四	三、八八	一、三六九	六、四	二、六九九	一、四三四	一、五二六
七、六五七	四、四	一、五二	二、三三	二、三三	一、三五九	一、八八〇
七、八三	六、〇九九	一、六六九	四、五〇	二、二四	一、三三四	一、六五九
六、二五四	五、三七七	一、五〇五	一、三三一	二、二四八	一、九四七	五、七
二、三二九	二、〇九九	六、〇六二	三、九三八	二、六〇二	一、九二一	一、三五三
一、九二七	一、四八	三、〇九四	一、二五四	七、〇五	七、〇五	四、九七

大正十四年

同十三年

同十二年

同十一年

同十年

同九年

同元年

三七、重要品別内地貿易

臺灣の内地貿易中移出品の主要なるものは、砂糖、米、芭蕉實、樟腦及樟腦油、木材及板材、酒精、切乾薯、石炭、鯨節等なり。今大正十四年に就て之を觀るに、砂糖は一億五百万圓を以て第一位を占め、米の七千二百萬圓、芭蕉實の九百萬圓、酒精の三百八十萬圓、樟腦及樟腦油の三百三十萬圓、木材及板材の二百八十萬圓、切乾薯の百三十萬圓、鳳梨罐詰及石炭の各百九十萬圓等順次之に亞く。

次に移入品の主要なるものは、綿織及絹織布、鹹魚及乾魚、肥料、鐵、酒類、紙、小麥粉等にして、大正十四年には米の一千六百萬圓を以て第一位を占め、綿織及絹織布の一千五百萬圓、肥料の六百三十萬圓、鐵の六百萬圓、鹹魚及乾魚の五百九十萬圓、小麥粉の三百九十萬圓、木材及板材並錫の各三百五十萬圓、紙の三百四十萬圓等順次之に亞く。

一 移出

砂糖	大正十四年 千円 一〇五、六五一	同十三年 千円 一九九、九二	同十二年 千円 二二八、八	同十一年 千円 八四、四九	同十年 千円 八四、七〇九	同九年 千円 一三五、三四	同元年 千円 二八、二三四
米	七、二一〇	四八、四八六	三、六七	三、五八二	一九、二九四	一七、二八	一〇、一七
酒	三、八五五	三、〇四〇	三、〇〇五	一、七六七	五、八〇一	九、九六三	一、五七九
樟腦及樟腦油	三、三三三	五、九九六	五、二二四	四、〇八〇	三、四九四	四、八四九	二、五七〇
芭蕉實	九、〇六六	一一、八二六	八、二八〇	六、八七六	四、二五六	一、八〇六	三、三七
切乾薯	一九、二	一、三六八	三、四二	三、五八	一	六、六四	三、七

模造バナマ	一、三九七	九一〇	四七三	六六三	五四二	三三〇	—
セメント	二〇四	一九八四	一、〇二七	七三六	八一	一八〇	—
食鹽	一、二四〇	一、六六九	一、〇〇七	九五〇	三六六	二二	三、七
木材及板材	二、八〇一	二、〇六九	三、三三七	一、七五三	五、六	一、四六八	二、七
鯨節	一、三三三	一、八九〇	一、八四二	一、八四二	一、二〇八	八五四	二、九
石炭	一九〇一	二、〇六五	一、八四一	一、七九〇	五七九	一、六一八	—
鳳梨罐詰	一九一八	一、三五二	九三五	八六〇	八六五	八四〇	三二

二 移入

大正十四年 千円	同十三年 千円	同十二年 千円	同十一年 千円	同十年 千円	同九年 千円	同元年 千円	
綿織及絹織布	二五、七〇八	七、九一六	六、四七三	六、四二二	七、七三七	六、〇三九	五、〇一六
鹹魚及乾魚	五、九〇六	六、四六九	四、三五五	四、一八二	四、九二	六、四三	三、〇五四
鐵	六、二一九	四、八九七	四、〇六五	四、二六二	六、〇三一	五、九〇九	一、八八〇
木材及板材	三、五三七	一、三七一	一、八四二	二、八九五	四、四〇〇	七、七三三	三、四七一
清酒	一九九九	一九四四	一、七〇八	三、七六八	三、六八三	二、五二三	一、三五四
麥酒	一、八七二	一、五六一	一、六四三	一、四七七	一九九九	一、八七九	四、六八
錫	三、五七四	一九〇九	一、四九二	六三八	八三	一、〇一六	五、八〇
過燐酸肥料	一、八〇七	一、三八七	七、八〇	七、六五	七、七	二、四三五	—
硫酸アンモニウム	二、八九一	二、八五四	一、六九八	一、二〇三	八三	—	—

調合肥料	一六〇八	二三八九	一四四九	二二六〇	二四四〇	四、五三七	—
ガソリン	二七六四	一六三七	五六二	二六	四六〇	六〇三	二二五
黄麻	一五六六	一、三四六	一、〇五五	一、二三八	一、五七八	一、八六三	四八二
燐寸	三、四三三	二、三三八	二、二七一	二、二五七	二、三六四	二、六二〇	八三八
紙	一六、八八二	二、四〇九	一九七八	五七二	一、六八〇	一、四一七	一、〇一八
米	二、二七四	一、五三九	一、二〇七	一、二〇〇	一、一〇一	一、九九六	五〇七
鐵製	一九〇二	一、八〇七	一、五二六	一、七二五	二、二一九	一、五四二	一、六九〇
煙草	三、九三六	二、四八四	一、五五五	二、二一九	一、五二八	一、七九五	一、六九〇
小麦粉	一、三九九	九七五	七七四	七四六	九九三	九九〇	四六七
各種罐詰食物	一、二七二	五四八	四七五	五四四	五二五	六三二	三二六
石油	一、六七〇	八八二	八三六	七五九	五二一	五五九	一六六
綿絲	一、〇一九	六七九	五四四	四三三	三九二	二三六	三四七
毛織物	一、六六五	八四〇	七六八	五三二	六五五	四四八	一九四
メリヤス肌衣(各種)							

三八 港別貿易

大正十四年に於ける臺灣の輸移出入貿易總額四億五千萬圓を港別に觀れば、基隆の二億五千萬圓第一位を占め、總額の五割七分に當り、高雄の一億七千萬圓之に亞て三割八分を占め、安平の一千三百萬圓、淡水の三百三十萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも尙僅かに總額の五分を占むるに過ぎず。

今之を内地其他の諸港と比較するに、基隆は神戸、横濱、大阪、大連に亞て第五位を占めて大連と釜山の中間に、高雄は第七位を占めて釜山と仁川との中間に在り。更に安平は鹿兒島と敦賀との中間に、淡水は徳山と下關との中間に位あす。

神戶	一、九三六、三三八	七五、九三四	一、三三〇、四〇四
横濱	一、五二一、〇三二	九〇、七二八	六三〇、二九四
大阪	八七〇、〇四二	五〇〇、六七三	三〇六、三六八
大連	五八八、三六五	三五〇、一九八	三三八、一六七
基隆	二五六、五〇三	一三八、四一六	一一八、〇八七
釜山	二二七、六二三	一二四、〇四〇	一〇三、五七二
高雄	一七二、〇一六	一三〇、六五四	五一、三六二
仁川	一三〇、〇三三	六三、五六三	六六、四五九
門司	一二七、〇一七	三三、九二〇	九三、〇九七
總額	一、九三六、三三八	七五、九三四	一、三三〇、四〇四

鹿兒島	一五、六五〇	二六二	一五、三八九
安平	一三、八〇六	九六	一三、八七八
敦賀	六、六五七	一四〇	五、二四七
德山	三、八〇三	九	三、七九四
淡路	三、三三七	七四九	二、五七八
下關	三、三三五	二二四七	一、〇六八

臺灣及朝鮮の輸出中には移出を、輸入中には移入を含む。
 朝鮮、關東州は同應統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

三九 財政

臺灣總督府特別會計か全く國庫の補助を受けずして、獨立の實を擧ぐるに至りしは、明治三十八年度なりき。而して同年度の歳入は僅かに二千五百萬圓に過ぎざりしか、爾來年と共に其の額を増大し、大正八年度には一億圓を突破し、大正九年度には一億一千九百萬圓を以て新記録を作りたりしか、大正十年度よりは少しく減退を示したり。然るに大正十四年度には再び一億一千九百萬圓に達せり。

次に歳入中其の主要部分を占むるは、官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は、年に依り多少の高低あるも、少きは三割九分、多きは七割五分を占む。

歳出は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓に増加し、更に大正十一年度には九千六百萬圓に増額したりしも、大正十二年度以降は八千萬圓臺に減退せり。

歳入 歳入百分比例

年度	總額	租稅	官業及官有財産收入	其他	指數	租稅	官業及官有財産收入	其他	歳出	指數
明治三十八年度	二五、四一四	七、三三五	一三、九二九	四、一〇二	一〇〇	二九一	五四八	一六二	二〇、四四三	一〇〇
大正元年度	六〇、二九六	一三、四九四	二四、七三〇	三三、〇七三	二三七	三三四	四一〇	三六六	四七、一八九	二三二
同 六年度	六五、四二五	九、九六九	三六、九五七	一八、四九九	三〇一	一五二	五六五	二八三	四六、一六七	二二六
同 七年度	八〇、五〇一	一一、三四六	三九、六八八	二九、四六六	三二七	一四二	四九三	三六六	五五、三三五	二七一
同 八年度	一〇〇、一六六	一五、二三〇	四五、六二九	三九、三〇七	三九四	一五二	四五六	三九二	七二、三三三	二五九

同	九年度	二九、二四八	二四、三〇二	五一、八四六	四三、〇〇〇	四六九	二〇四	四三、五	三六、一	九五、三三四	四六六
同	十年度	一一、〇三六	二二、三三九	四三、九六五	四六、八三一	四四一	一九〇	三九二	四一八	九四、五二〇	四六二
同	十一年度	一一、四二一	一九、〇二七	五九、六五七	三四、七四九	四四六	一六八	五二六	三〇六	九六、三四七	四七一
同	十二年度	一一、〇九八	一七、六七三	六五、二二〇	二八、三〇五	四三七	一五九	五八六	二五五	八七、七三九	四三九
同	十三年度	一一、三六五	一七、五九七	六四、二七九	三二、七三九	四四七	一五五	五六六	二七九	八六、八六二	四三五
同	十四年度	一九、五〇〇	一八、三八四	六九、六三六	三一、五四〇	四七〇	一五四	五八二	二六四	八七、七七二	四三九
同	十五年度	九九、七五五	一五、五五五	七四、九五二	九、二六八	三九三	一五六	七五二	九三	九九、七七五	四八八

本表中大正十二年度迄は決算、大正十三年度及同十四年度は現計、大正十五年度は豫算なり。

四〇 專 賣

臺灣の專賣は現在、阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるか、就中酒は大正十一年七月以降の實施とす。今最近十四年間に於ける賣渡價額を觀るに、大正元年度に千七百萬圓なりしものか、大正六年度には二千萬圓を越ゆるに至り、更に大正九年度には三千萬圓を突破したるも、翌大正十年度には經濟界の世界的不況に伴ひ、樟腦の如きは特に前年度の一千萬圓より五百萬圓に減退したる爲め、總額も二千五百萬圓に低下したりしか、大正十一年度には稍々景況を回復したると、酒專賣實施の結果總額三千四百萬圓に達し、大正十二年度には四千萬圓を突破し、大正十四年度には四千三百萬圓に増加せり。

賣渡總價額

阿片烟膏

食 鹽

大正元年度	一七、〇九六、九二一	六〇、二七、八三八	七四七、九三三
同 二年度	一六、四九七、五〇〇	五、八八六、四〇〇	八〇八、九二二
同 三年度	一六、三六二、八三三	五、六八三、八六四	八六六、四六九
同 四年度	一六、五二一、七三四	五、八〇〇、七二四	八七三、九七八
同 五年度	一九、五九七、九二二	六、五九〇、一五三	九五三、九三五
同 六年度	二一、〇三五、七〇二	六、九二四、三七七	一一、八〇、四六五
同 七年度	二二、六六二、三四五	七、五五二、二四五	一、〇九三、二〇五
同 八年度	二七、四三三、三六一	七、六一九、四二二	九九九、〇八五
同 九年度	三三、九七三、八三五	七、七〇八、三三五	九九七、七七八

同	同	同
十二年	十三年	十四年
三〇	二四	二五
一〇三	九	二五
三三	一〇	一七
四六	四三	四〇
二〇三	二〇三	二〇三
二六	二五	二六
二七	二四	二五
二七	二六	二五

四三 教育

臺灣の教育は、大正十一年二月發布の臺灣教育令に依り、從來の方針を一變し、初等教育を除くの外は、悉く内臺人共學の制を採るに至れり。而して初等教育機關たる小學校及公學校の八百六十二校、兒童二十四萬五千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校の二十一校、生徒七千五百人、師範學校は三校、生徒千七百人、實業教育機關たる實業補習學校、農林學校、工業學校、商業學校の二十校、生徒二千百人、專門教育機關たる醫學專門學校、高等農林學校、高等商業學校、商業專門學校の四校、生徒八百人、私立各種學校二十校、生徒二千五百人、書房百十二、生徒四千八百人あり。

次に初等教育機關を内地其他と比較するに、人口千に對する小學校兒童數は、北海道の百六十五人最も多く、關東州の九十一人九分最も少く、我臺灣は百三十人七分を以て朝鮮、關東州の上に位す。又臺灣の公學校、朝鮮の官公私立普通學校、樺太の土人教育所及關東州の官立公學堂並公立普通學堂兒童の人口千に對する割合は、樺太の百十八人八分最も多く、我臺灣は五十七人三分を以て之に亞き、朝鮮は僅かに二十人八分を以て最下位に在り。

一 教育機關 (大正十四年度)

醫學專門學校	學校數	教員數	生徒又は兒童數	教員一人に付生徒
一	一	一	三	三

高等農林學校	1	38	161	42
高等商業學校	1	36	233	59
商業專門學校	1	40	268	65
高等學校	1	66	268	67
師範學校	3	169	198	67
中學校	9	347	195	68
高等女學校	2	193	198	68
農林學校	1	14	386	95
工業學校	1	4	230	164
商業學校	2	37	599	254
小學校	133	783	2472	371
公學校	79	5056	21010	377
實業補習學校	6	5	74	435
私立各種學校	20	233	2564	110
書房	13	171	485	281

學校(小、公學校は分教場を含む)は年度末現在、教員生徒(兒童)は三月一日現在なり。教員には兼務者を含む。

二 内地其他との初等教育比較

小學校	校數	教員數	兒童數	一校平均兒童數	教員一人に付兒童數	人口千に付兒童數
臺灣	133	783	2472	163	37	1307
朝鮮	451	1801	5462	221	303	1286
關東州	160	649	2466	154	381	1344
北海道	5	677	3268	463	37	919
關東州	160	649	2466	154	381	1344
北海道	5	677	3268	463	37	919
内地府縣	3859	19150	874936	357	484	1650
公學校	79	5056	21010	319	435	573
臺灣	133	783	2472	163	37	1307
朝鮮	451	1801	5462	221	303	1286
關東州	160	649	2466	154	381	1344
北海道	5	677	3268	463	37	919
關東州	160	649	2466	154	381	1344
北海道	5	677	3268	463	37	919

公學校の朝鮮は官公私立普通學校、樺太は土人教育所、關東州(州内、州外、領事館)は官立公學校及公立普通學校の事實なり。人口千に付兒童算出の基數は、小學校に在りては内地人のみを、公學校に在りては各其の本土人のみを以て算出す。

臺灣の児童は大正十五年三月一日現在なり。
 朝鮮は大正十四年度末(児童は大正十五年三月一日)現在にして同府統計書に依る。
 樺太は大正十四年度末現在にして同廳統計書に依る。
 關東州(州内、州外、領事館)は大正十四年度末現在にして同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は大正十二年度末(児童は大正十三年三月一日)現在にして帝國統計
 年鑑に依る。

四四 衛生機關

臺灣には大正十四年末現在、官立十二、公立十九、私立七十一、計百二の醫院と、九百七十二名の醫師と、五百二十二名の醫生と、一千三名の産婆を有す。醫師、醫生一人に對する人口は全島平均二千七百十九人にして、その割合の最も少きは新竹州の二千二百九十六人、最も多きは臺東廳の三千九百二十六人なり。

總數	醫院		醫師及醫生		産婆	醫師醫生一人に付人口
	官立	公立	醫師	醫生		
臺北州	三	九	一四九	九七	一〇三	二七九
新竹州	一	六	三三七	二五七	一九四	二四三
臺中州	一	一	二六六	八	四	二二六
臺南州	二	二	三〇九	二〇三	一〇〇	二八六
臺南州	二	七	三四三	二四七	四八三	三〇四
高雄州	三	二	一九四	一四	一六四	三〇五
臺東廳	一	一	二	二	三	三九六
花蓮港廳	一	一	九	二	一	二七一
總數	三	一九	一四九	九七	一〇三	二七九

醫生とは明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て其の管轄内に於て醫師を業と爲す者とす。
 本表の外藥劑師八十五名、齒科醫師九十四名を有す。

四五 水道

臺灣に於ける既設水道の總數は大正十四年度末に二十九箇所あり。其の所管は臺灣總督府所管一(恒春種畜支所)、陸軍省所管三(臺東、玉里、バロン)、州所管一(南方澳)、廳所管二(花蓮港、ピナン)にして其の他は總て所在市街庄の經營に係る。
 同年度末現在給水戸數は、臺東、バロン、ピナン、恒春を除き、専用栓給水戸數二萬六千三十九戸、共用栓給水戸數二萬一千六百三戸にして、其の消費水量は消費水量不明の七水道を除き、二千五百八十七萬餘立方米なり。

名稱	給水開始年月	年度末現在		年度中消費水量(立方米)		
		専用栓戸數	共用栓戸數	總數	計量供給	放任供給
淡水	明治三二年三月	四四三	七九四	七九五、四六八	四〇、五〇二	七五四、九六六
基隆	同 三五年三月	三、五〇七	二、三九一	二、四七〇、〇六〇	二、四七〇、〇六〇	—
彰化	同 四一年四月	五、六五	三、三五	四三三、二四〇	八八、五三二	三四四、七〇八
臺北	同 四二年七月	一〇、六二八	八、四八八	七、四〇一、七九七	七、四〇一、七九七	—
金山	同 四三年六月	二	一九九	?	—	?
士林	同 四四年五月	二〇〇	四九六	三七〇、四七五	一五、四四八	三五五、〇二七
北投	同 四四年六月	九二	三六七	一九、四六四	一六、九六四	一〇、一五〇〇
大甲	同 四五年六月	二三五	一〇五	四三三、〇〇〇	九一、八〇〇	三三二、二〇〇
斗六	大正元年八月	一五九	七五	二〇三、二六六	八一、六三二	一二〇、六三四

同	十二年	三九四三	三九三五	五四九八	三三	二二	三九	〇六
同	十三年	三六六七	三二四二	五二二六	三三	二二	三六	〇六
同	十四年	三七七五	二九〇二	四七五四	三九	一七	二八	〇五

本表は各年十二月末日現在にして本島人のみの事實なり。

四八 鐵道

臺灣の鐵道は、大正十四年度末には官設鐵道(阿里山鐵道を含む)の營業哩數五百六十哩に達し、外に私設鐵道千三百十二哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所に於て内、營業線は三百十四哩なり。

今之を内地其他と比較するに、百方に付鐵道營業線の哩數は、關東州の二百八十八哩四分最も多く、我臺灣の七十哩五分之に亞き、樺太の五哩八分最も少く、更に人口萬に付哩數は樺太の七哩一分最も多く、朝鮮は約一哩にして最も少く、臺灣は二哩二分を以て内地の上に在り。

營業線路延長(哩)

	營業線路延長(哩)		百方に付哩	人口萬に付哩
	官設	私設		
臺灣	八七七	三二四	七〇五	二三
朝鮮	一八三	五〇四	二二七	一〇
關東州	一三五	—	五八	七二
樺太	六九五	—	二八四	六四
關東府縣	一〇、四二四	七五五八	四三二	一七
内地道府縣	—	二八五六	—	—

朝鮮、樺太、關東州は大正十四年度末現在にして同應統計書に依る。
内地道府縣は大正十三年度末現在の開業線哩にして帝國統計年鑑に依る。

四九 郵便、電信、電話

臺灣に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、大正十四年度に於て通常郵便は引受五千七百萬、配達六千六百萬、電信は發信百三十萬、著信百四十萬、爲替は振出二千五百萬圓、拂渡千六百萬圓、貯金は預入一千二百二十萬圓、拂戻一千百三十萬圓、貯金現在九百萬圓、振替貯金口座受入六千八百九十萬圓、拂出六千八百八十萬圓、現在四十七萬九千圓なり。又同年度末現在電話加入者數は一萬一千三百二十八、年度中加入者發信通話度數は五千萬なり。

今之を内地其の他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入を通して最多數を示すは樺太にして、其の最小數は通常郵便引受、電報發信及爲替振出の三は朝鮮、貯金預入は臺灣なり。又人口十に付電話加入者數の最も多きは樺太、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に付通話度數の最も多きは關東州、最も少きは内地府縣なり。

一 郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便

引配引
人口十に對する
受達

五七、四八、二六、六六
六六、七〇、四、四、五三

一四、一五

電	爲	貯	爲	電
話	替	金	替	信
加入者	振入	預入	振入	發入
人口千に對す	口十に對す	口十に對す	口十に對す	口十に對す
加入者數	振入者數	預入者數	振入者數	發入者數
28	1,338	68,906,364圓	25,674,436圓	1,384,531
50,031,253	1,633,208圓	68,842,788圓	26,163,208圓	1,426,253
	632	47,934,211圓	6,332	3,444
	277	47,934,211圓	277	
	1,489	47,934,211圓	1,489	

(加入者一に付通話度數)

二 内地其他との比較 (大正十四年度)

人口十に對する

電話

臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
1,415	983	1,354	4,033	7,655	7,445
34	27	482	196	231	122
3,322	578	1,386	1,563	3,094	2,445
277	285	394	98	1,910	1,407
28	14	143	132	94	73
4,394	4,440	5,156	7,088	5,227	3,918

朝鮮、樺太、關東州(州内、州外)は同應統計書に依る。
 北海道及内地府縣の通常郵便引受(大正十四年度)には外國郵便を、爲替振出には外國爲替を含ます。
 北海道、内地府縣は大正十三年度の事實にして帝國統計年鑑に依る。

五〇 警察官署及職員

臺灣の地方警察機關數は大正十四年末現在に依れば、州警務部五、廳警務課二、警察署六、郡警察課四十六、支廳七、派出所及駐在所千三百九十三にして、同職員の數は警視十五人、警部及警部補四百九十人、巡查六千八百八十六人なり。

今之を内地其他と比較するに、一方里に對する巡查の數は、關東州の九人七分最も多く、臺灣は三人を以て之に亞き、巡查一人に付人口は北海道の千二百四十三人第一位を占め、内地府縣の千百十五人之に亞き、我臺灣は六百二人を以て僅かに關東州の上に在り。

警察署	警察分署	派出所及駐在所	警視		警部及警部補		巡查		一方里に付人	巡查一人に付人口
			警視	警部及警部補	巡查	巡查				
臺灣	1	1	1,393	5	490	6,886	30	632		
朝鮮	1	1	2,433	4	1,091	7,288	12	1,066		
樺太	6	4	6	2	29	248	1	732		
關東州	9	4	380	9	141	2,339	97	466		
北海道	3	3	653	3	189	2,010	44	1,233		
内地府縣	76	383	2,789	23	4,291	52,333	27	1,255		

本表は大正十四年末現在なり。
本表巡查一人に付人口中臺灣の分は蕃地居住の蕃人を算入して算出す。

臺灣の警察署には郡役所警察課及支廳を含む。
 關東州の警察支署及民政支署は警察分署として掲上す。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、州外、領事館)は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

五一 最近十四年間の進歩

農畜林		耕作		人口	
畑	田	總	外	本	内
產	產	數	國	島	地
二五、六六八、七三圓	七、九一、七二圓	三、四、五、一七〇	一、七、九、九	三、二、三、三、三	三、四、五、一七〇
二、七、九、八、五圓	二、六、九、八、三、〇六七圓	四、一、四、七、四、六、三	三、三、二、五、八	一、八、九、六、三、〇	四、一、四、七、四、六、三
?	三、六、〇	一、八、五	一、〇、六	二、九	三、一
?	三、六、〇	一、八、五	一、〇、六	二、九	三、一

大正元年を百
 として
 の指數

鑛	水	工	糖	製	甘	製	總	外	內	財	歲	歲	專	總
產	產	業	積	高	積	高	額	易	易	政	入	出	賣	額
四,四八二,五二圓	一四,六二七,三四圓	二,二五〇,六八七圓	七五,三九甲	二四九,三九九,七九斤	二四九,三九九,七九斤	二四九,三九九,七九斤	二三五,四二四,〇九五圓	三四二,六七,三五圓	九一,一五六,七四二圓	六〇,二九五,八五八圓	四七,二八八,五七六圓	一七〇,八二二,三四六圓		
一四,六二七,三四圓	一七,七〇五,四九六圓	二,二五〇,六八七圓	一三三,九五二甲	八三三,二〇九,六六五斤	八三三,二〇九,六六五斤	八三三,二〇九,六六五斤	四四九,六〇九,九九一圓	一〇四,四五四,九〇四圓	三四五,一五五,〇八七圓	二九,五五九,八七六圓	八七,七七〇,八七五圓	四三,〇六六,〇四七圓		
三三六	七八六	四六五	一六五	三三四	三三四	三三四	三五八	三〇五	三七九	一九八	一八六	二五二		

(大正十五年)

阿片	食鹽	樟腦	煙草	酒	教	小	公	中	實	師	專	鐵	官	運	收
賣渡價額	賣渡價額	及副產物	賣渡價額	賣渡價額	育	校	學	等	業	範	門	道	設	輸	入
六,〇二七,八三八圓	七四七,九三三圓	五,七六五,〇三〇圓	四,五四一,五四六圓	—	育	校	校	校	校	校	校	道	線	乘	貨
四,九二一,六六八圓	二,四六五,六四九圓	三,〇七八,四二七圓	三,四五六,一五四圓	二,一四四,一四九圓	育	校	校	校	校	校	校	道	線	客	物
八二	三三〇	二二〇	二七四	—	育	校	校	校	校	校	校	道	線	貨	質

三〇三哩

五六三哩

二,二三五,八九四圓

六,九六八,六〇二圓

三三三

二,五四八,〇三四圓

九,三八四,〇二〇圓

三六八

二二〇

八〇一

三八二

四六四

一,六九九

三六六

五八

二,一八六

三,七六九

一,〇〇七

七,五六九

七五二

四九,五五四

二,一〇,二一〇

四四四

八,八八〇

二四,七八二

二七六

私設鐵道線路延長
郵便、電信及電話

八〇八哩

一、三三哩

一六

通常郵便引受通數

三〇,五七五,二二四

五七,四八一,六六六

一八八

電報發信通數

九〇三,三六一

一,三八四,五三三

一五三

爲替振出金額

一四,三九七,〇四五圓

二五,六七四,四三六圓

一七八

貯金預入金額

三,一九六,二四三圓

一一,二四七,〇五七圓

三五三

電話

三,七五八

一一,三三八

三〇一

加年度末現在
通話度數

一七,六三四,六二〇

五〇,〇二二,一五三

二八四

昭和二年六月廿八日印刷
昭和二年六月三十日發行

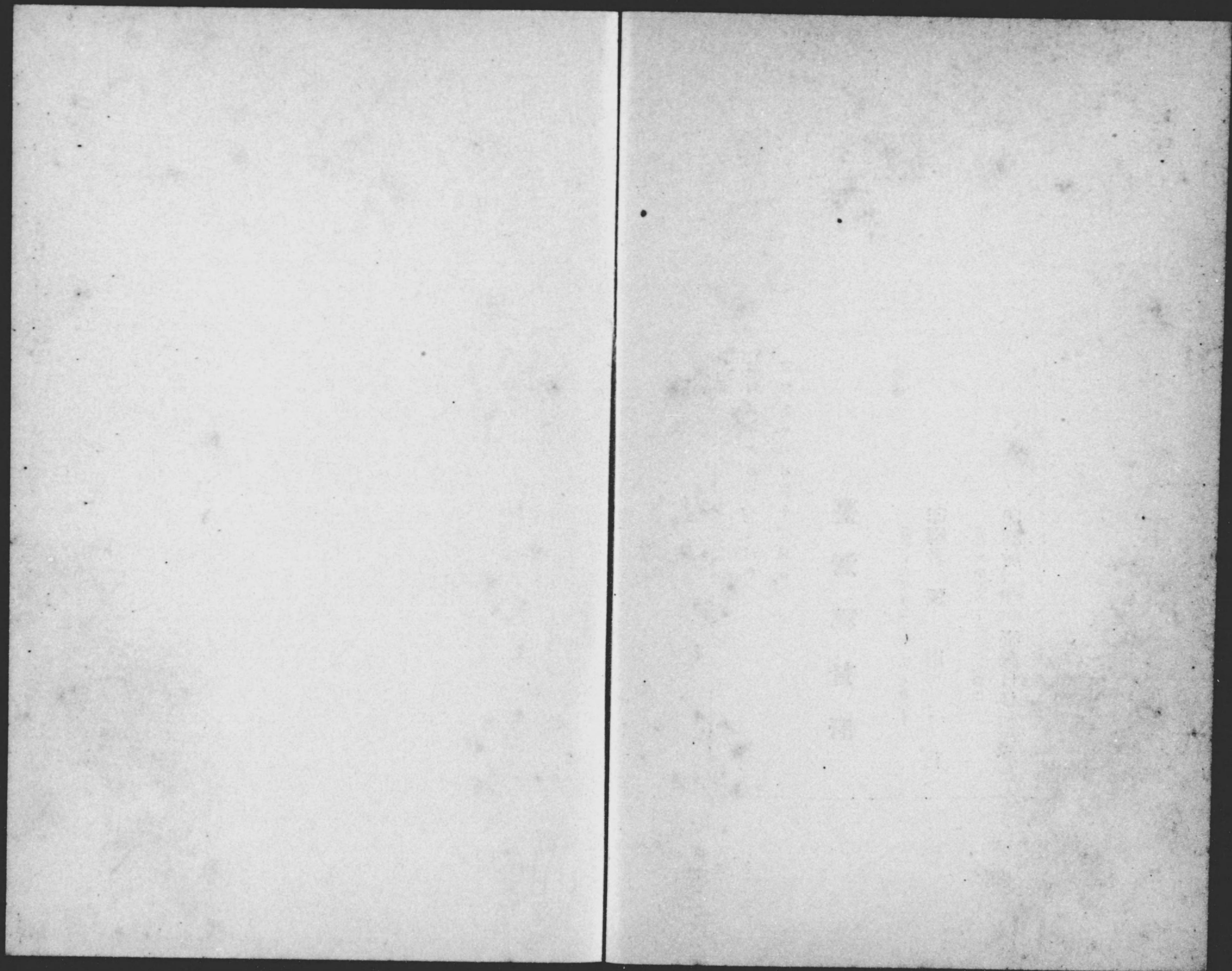
臺灣總督府

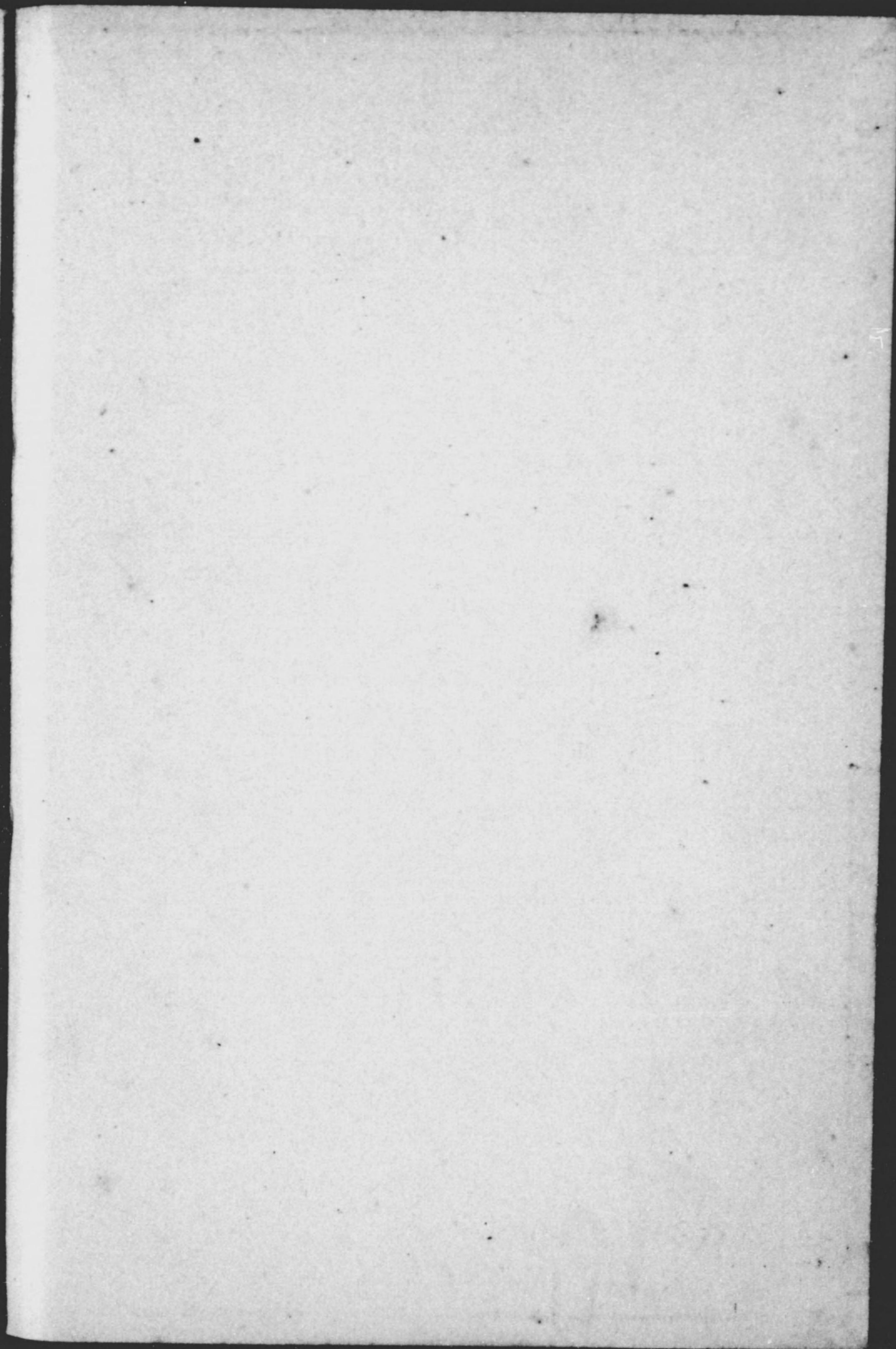
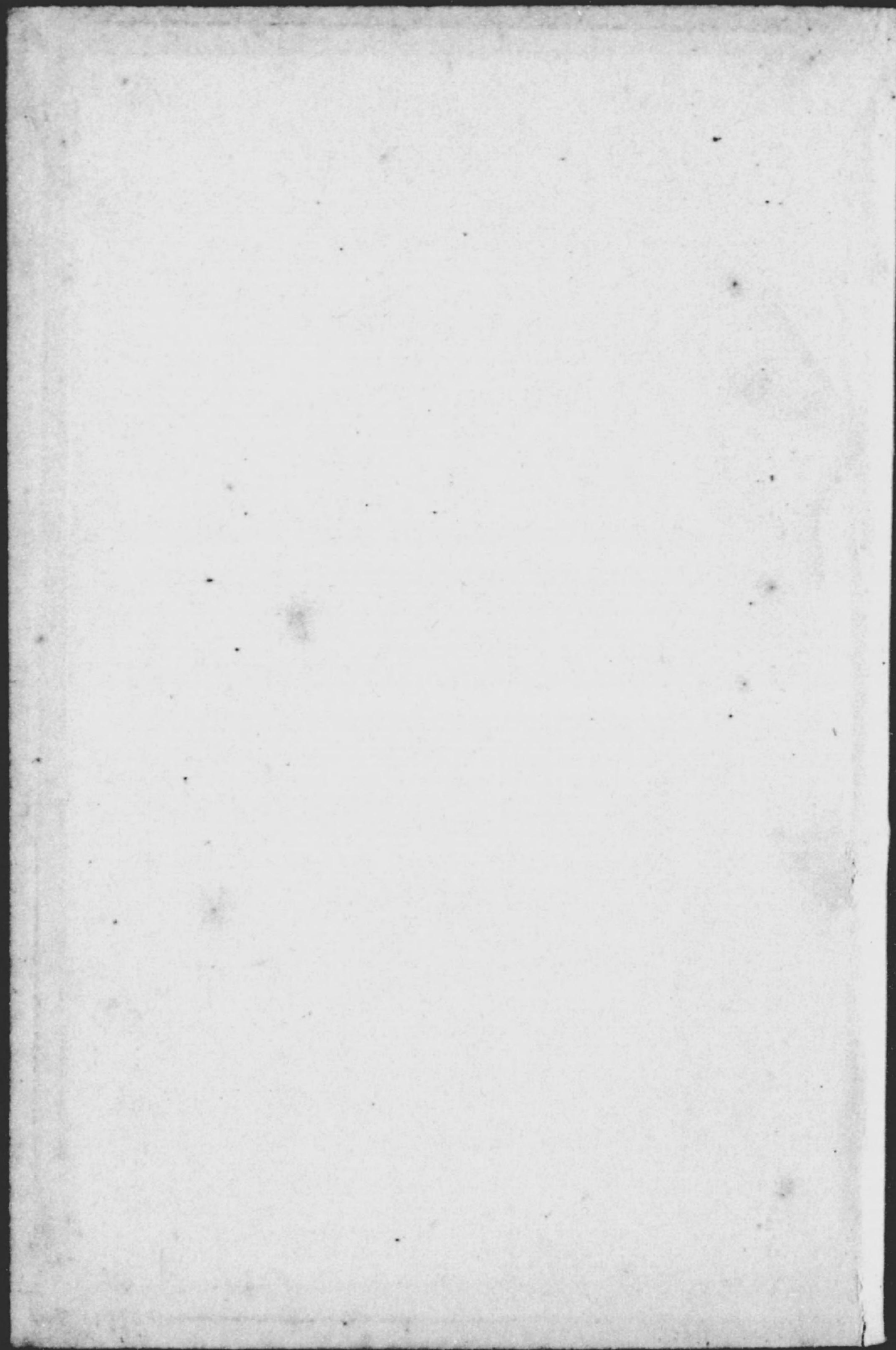
臺北市大正町二丁目三十七番地

印刷者 額川首

臺北市榮町四丁目三十二番地

印刷所 株式會社 臺灣日日新報社





1

2

